

平成30年度 むらネット九州

(豊かなむらづくりをめざして)

<http://www.maff.go.jp/kyusyu/keikaku/murazukuri/murazukuri.html>



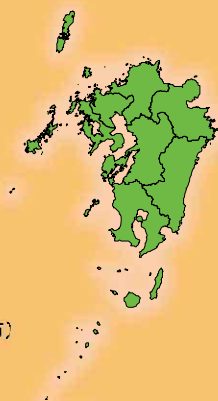
“みんなが主役” 中山間地のむらづくり
小野谷行政区 (福岡県嘉麻市)



甘藷で躍進する集落営農組織を中心としたむらづくり
農事組合法人芦刈農産 (大分県豊後大野市)



農林水産物直売所を核としたむらづくり
上天草物産館さんばーる出荷協議会 (熊本県上天草市)



～山は友達・命の源 続けることが力～
焼畑蕎麦苦楽部 (宮崎県椎葉村)



400年の歴史を伝えるむらづくり
中津川区公民館 (鹿児島県さつま町)

農林水産省
九州農政局

目 次

第 57 回（平成 30 年度）農林水産祭むらづくり部門

- 1 中津川区公民館が日本農林漁業振興会会長賞を受賞
- 2 天皇杯
本寺地区地域づくり推進協議会（岩手県一関市）
- 3 内閣総理大臣賞
特定非営利活動法人ゆうきハートネット（岐阜県白川町）

受賞団体の紹介

- 4 日本農林漁業振興会会長賞・農林水産大臣賞
中津川区公民館（鹿児島県さつま町）
- 農林水産大臣賞
- 10 小野谷行政区（福岡県嘉麻市）
- 16 焼畑蕎麦苦楽部（宮崎県椎葉村）
- 九州農政局長賞
- 22 上天草物産館さんばーる出荷協議会（熊本県上天草市）
- 26 農事組合法人芦刈農産（大分県豊後大野市）

豊かなむらづくり全国表彰事業

- 30 「豊かなむらづくり全国表彰事業」と「農林水産祭」
- 31 むらづくり部門天皇杯等受賞団体一覧表
- 32 受賞団体一覧表（九州ブロック県別）

施策情報

- 39 福祉と農業が連携する「農福連携」

“むらネット”とは

豊かなむらづくり九州ネットワーク（以下「むらネット」という）は、「豊かなむらづくり全国表彰事業（詳細は P30 参照）」における受賞団体ならびにむらづくり活動の推進強化を目指している団体を対象として、団体相互間の情報交換、交流促進等を図ることを目的に、九州農政局が事務局となって、平成 12 年に設置したものです。

むらネットでは、この冊子『むらネット九州』を作成・配布して、豊かなむらづくり全国表彰事業の受賞団体、むらづくりに関する施策情報等を会員の皆さんにご紹介しています。また、会員の活動等も九州農政局のホームページに掲載しています。

むらネットへの加入申込やお問い合わせ等がございましたら、九州農政局農村振興部農村計画課（裏表紙の連絡先を参照）まで、ご連絡下さい。

平成30年度（第57回）農林水産祭むらづくり部門 中津川区公民館が日本農林漁業振興会会長賞を受賞

鹿児島県さつま町



日本農林漁業振興会会長賞を受賞した中津川区公民館

平成30年度農林水産祭むらづくり部門では、本寺地区地域づくり推進協議会（岩手県一関市）が天皇杯を、特定非営利活動法人ゆうきハートネット（岐阜県白川町）が内閣総理大臣賞を、そして中津川区公民館（鹿児島県さつま町）が日本農林漁業振興会会長賞を受賞しました。

本寺地区地域づくり推進協議会は、中世から続く農村景観を守り続けていくため、曲がりくねった土水路・畦畔を残す景観保全を重視した農地での水田農業を継続できる仕組みづくり、特産作物の生産や女性を主体とした6次産業化の取組等を行っており、地域住民が地域に誇りを持ち、地域外のサポーターを巻き込みながら活動をしています。

特定非営利活動法人ゆうきハートネットは、「田園回帰」を志向する若者のニーズに応え、きめ細かなサポートを行うことで若者の新規就農、定住を促し、地域の農業の担い手不足の解消や地域の活性化に大きく寄与しており、有機農業をキーワードに若者のニーズをうまく拾い上げ、移住者が地域に早く溶け込めるよう橋渡しを行っています。

中津川区公民館は、青壮年層が中心となり、消滅の危機に直面した伝統芸能の復活に取り組む、これを契機に地域住民の交流と地域活動の活性化が図られており、特産品開発、若者のUターン、農業後継者の育成につながっています。

3団体は、これらの取組が高く評価され、今回の受賞となりました。

平成30年度（第57回）農林水産祭むらづくり部門天皇杯等受賞団体

受賞区分	団体名	所在地
天皇杯	本寺地区地域づくり推進協議会	岩手県一関市
内閣総理大臣賞	特定非営利活動法人ゆうきハートネット	岐阜県加茂郡白川町
日本農林漁業振興会会長賞	中津川区公民館	鹿児島県薩摩郡さつま町

天皇杯 本寺地区地域づくり推進協議会

（岩手県一関市）

～伝統的な農村景観の保全と活用をめざしたむらづくり～

■地域の沿革と概要

一関市は、盛岡市と宮城県仙台市の間地点に位置している。本寺地区は、市街地から西方に約20km離れた山間に位置し、かつて「^{ほねでらむら}骨寺村」と呼ばれた中尊寺の経蔵別当の荘園があった。7つの集落により構成され、山に囲まれた平坦地には、水田を中心とした耕地が広がる典型的な中山間地域である。



■むらづくり組織の概要

- ① 平成15年度に、「平泉の文化遺産」の推薦遺産に骨寺村荘園遺跡が追加されたことを契機に、全戸加入による「本寺地区地域づくり推進協議会」を設立し、荘園遺跡と共存する活力ある地域づくりに取り組み始めた。
- ② 本協議会には、地区農業全般を担当する営農部会、景観保全型ほ場整備を担当する基盤整備部会、景観を生かした地域おこしを担当する地域おこし部会の3つの部会を置き、さらに平成16年度から岩手大学が加わり活発な活動を展開している。
- ③ 平成18年度には、郷土料理レストラン、産直コーナーの開設に関する計画を作り、女性部会を新設した。

■むらづくりの取組概要

（1）農業生産面

- ① 荘園景観の保全と農地整備を両立させ、生産性の向上を図り、自然乾燥等にこだわった「骨寺村荘園米」としてブランド化に取り組んでいるほか、骨寺荘園米オーナー制度を創設し、販路の拡大と収益性の向上を図っている。
- ② 日本在来の鶴首カボチャの一種で糖度の高い「南部一郎カボチャ」の特産化に取り組み、年間10トンを生産。形の良い7割は生食向け、その他はペースト等に加工し、大手百貨店の通信販売等で販売している。
- ③ 平成23年度に設置した「骨寺村荘園交流館」には、郷土料理レストラン、産直コーナーを併設し、女性部会会員が運営に関わっており、女性の所得向上とともに、地域経済の活性化を図っている。

（2）生活・環境整備面

- ① 中世から続く農村景観を守り伝えていくため、土水路の維持管理について、建設業の関連団体と協定を結び、地域住民とともに、年2回の泥上げを実施している。
- ② 骨寺村荘園交流館を活動拠点に、季節ごとに地域行事を行い、住民同士の交流を積極的に行うほか、大学生等との都市農村交流活動、教育旅行の受け入れ、伝統行事である中尊寺への米納めの復活や伝統芸能「鶏舞」の伝承活動などに取り組んでいる。
- ③ 中学生を対象に、骨寺村荘園遺跡のボランティアガイドの養成事業を開始するなど、将来故郷への誇りを持ち、定住することを期待する取組を行っている。

内閣総理大臣賞 特定非営利活動法人ゆうきハートネット (岐阜県白川町)

～人と里をハートでつなぐむらづくり～

■地域の沿革と概要

白川町は、岐阜県の東部に位置する山間農業地域であり、町の主要産業は農業と林業。農業については、高級茶である「白川茶」に加え、近年、寒暖差が大きい山間地域の特徴を生かし、夏秋トマトの生産に取り組んでいる。



■むらづくり組織の概要

- ① 平成10年に、10名の農業者が有機農業の生産技術の研鑽を目的として任意団体「ゆうきハートネット」を立ち上げ、稲作を主体に、有機農業に取り組み始めた。
- ② 平成23年に法人化し、有機農業研修施設「くわ山結びの家」を設置するなど、新規就農者の育成や移住者の受入を通じて地域振興を図る体制を整備した。
- ③ 具体的には、会員数44名で若手中心の組織となっており、ア)技術向上のための事業、イ)消費者との交流、ウ)新規就農者の参入促進と町内への定住支援、エ)有機農産物の販売促進事業の4つの事業に取り組んでいる。

■むらづくりの取組概要

(1) 農業生産面

- ① ゆうきハートネットは、消費者との直接契約販売、名古屋市のオーガニックファーマーズ朝市村での販売、有機農産物を取り扱うスーパーと提携した販売などを通じて、会員の経営安定につなげている。
- ② 講演会、研修会等により、会員の技術向上や新規就農者の技術取得に寄与しており、白川町の水稲における有機栽培の面積割合は5.3%と高い。
- ③ 法人化した平成23年から7年間で18戸50名の移住者を受け入れるなど、有機農業を始めたい就農希望者を積極的に受け入れている。
- ④ 郷蔵米生産組合、大豆畑トラスト、はさ掛けトラストの取組や、安全なわらを壁材とした「ストローバイルハウス」の建設、有機たい肥、三年番茶の生産など、会員個々による創意工夫した取組が広がっている。

(2) 生活・環境整備面

- ① ゆうきハートネットが、就農希望者に対する農地や住居のあっせんなど、就農・移住全般についてサポートすることにより、若手移住者はスムーズに地域に溶け込み、今日まですべての移住者が地域に定着して農業に従事している。
- ② 田植えや稲刈りなど、消費者との交流イベント、有機農産物を取り扱うスーパーでの販売活動、子どもたちとの農業体験等を通じて、都市住民との交流活動に積極的に取り組んでいる。
- ③ 若手移住者は全ての世帯が消防団に加入し、地域の伝統文化である地歌舞伎に参加するなど地域活動にも積極的に貢献している。

日本農林漁業振興会会長賞・農林水産大臣賞受賞

なかつ がわく

中津川区公民館

(鹿児島県さつま町)

～400年の歴史を伝えるむらづくり～

■地域の沿革と概要

鹿児島県の北西部に位置するさつま町は、平成 17 年に^{さつまちょう}薩摩町、^{みやのじょうちょう}宮之城町及び^{つるたちょう}鶴田町が合併して誕生した町で、南九州一の大河「川内川」が貫流しており、森林、竹林、温泉、伝統文化やホテル等の豊かな地域資源に恵まれている。

中津川区公民館（以下「区公民館」という。）のある中津川地区はさつま町の東部に位置し、昭和 24 年からの 5 年間は中津川村だった地域で、5 集落で構成されている。



図 1. 位置図

■むらづくりの概要

1. 地区の特色

本地区では、織田・豊臣時代にこの地域一帯を治めていた島津金吾左衛門尉歳久公を住民が「金吾さあ（様）」と慕い、歳久公を祀る「大石神社」の秋季大祭には、地区の 5 集落がそれぞれに踊りを奉納し続けており、大石神社をとおして集落や地区のまとまりをもつ地域である。

本地区の農業は、川内川の支流が天然の用水路として水田を潤し、風水害の被害を受けにくい恵まれた地形にあることで数百年前から水稻の適作地として集落による水路・畦管理等に取り組みながら米の産地を確立してきた。



写真 1. 大石神社秋季大祭時期の中津川

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機・背景

①消滅の危機に直面した「大念仏踊り」

大石神社に奉納される「金吾様踊り」には、毎年の秋季大祭で各集落等から奉納される踊りのほか、日照り続きの際の雨乞いや水田害虫の発生防止の立願を行うため、数十年に 1 度奉納されていた「大念仏踊り」がある。

「南無阿弥陀仏」の高唱から始まる単調な行列と、各集落から選び抜かれた踊り手による舞とが掛け合わさった「大念仏踊り」は、県内の民俗芸能の中でとりわけ規模が大

地区データ

- | | |
|------------------|-------------|
| ①所在地：鹿児島県薩摩郡さつま町 | ②地区の規模：5 集落 |
| ③総人口：981 人 | ④総世帯数：430 戸 |
| ⑤農家戸数：191 戸 | ⑥主要農産物等：水稻 |

※③④は H30 年時、⑤は 27 年時

きく、昭和 30 年の奉納時には県内から約 4,000 人の観客が詰めかけたと言われている。ただ、住民の誇りである「大念仏踊り」は、平成 30 年の奉納を最後に途絶え、消滅の危機に直面していた。秋季大祭も平成初期になると、観客数と踊り手が同人数というほどに観客数が減少し、かつての賑わいが薄れつつあった。



写真 2. 島津歳久公を祀る「大石神社」



写真 3. 消滅の危機に直面した「大念仏踊り」

②住民総参加のむらづくり計画の策定

昭和 60 年当時の中津川地区は人口 1,618 人だったが、その 5 年後の平成 2 年には、1,446 人（89%）にまで減少し、中津川地区の将来について不安を抱く住民が多くなってきた。そのため、区公民館が中心となって住民総参加の話し合いに取り組み、6 年に「中津川地区地域づくり活性化計画」を策定した。

策定に際し、本地区の将来を語る中で住民からあがったのは、大石神社の『金吾様踊り』に賑わいを取り戻したい、長年の懸案である「金吾様踊り」の一つ『大念仏踊り』を復活させたい」という声であり、話し合いを重ね、農業面だけでなく、農村文化の継承を含めた計画ができあがった。



図 2. 人口・世帯数の推移

（2）むらづくりの推進体制

①中津川区公民館

区公民館は、区公民館長及び 5 公民会（各集落）の代表が運営や各種行事の企画・調整の中核となっている。また、各集落から人選し、総務部、体育部、福祉部、文化部及び産業経済部の 5 専門部会で構成し、各専門部長及び各公民会長交えた役員会により、各種事業計画や実施に向けた詳細を検討している。

平成 22 年には住民へのアンケート調査を実施し、23 年には農業分野のほかに、福祉、環境整備、商工業及び観光等の分野を含めたむらづくりの方向性を定めた「中津川地区地域づくり活性化計画」を策定した。また、27 年度には計画の見直しを行い、地域の将来像や目標の実現に向けた取組を実践中である。

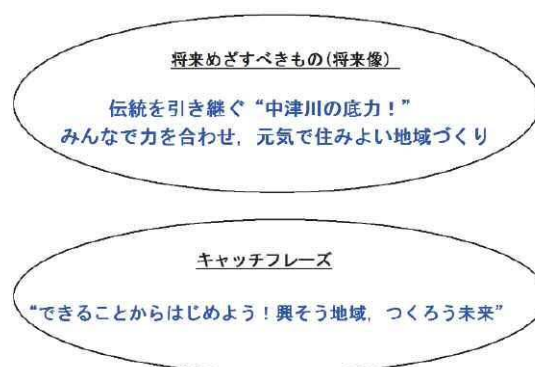


図 3. 地域づくり活性化計画の将来像等

②区公民館との連携組織（実践組織）

区公民館と連携し実践活動を展開する組織として、金吾様踊り活性化実行委員会、吾友会及び夢はな会等がそれぞれの目的をもって組織されている。

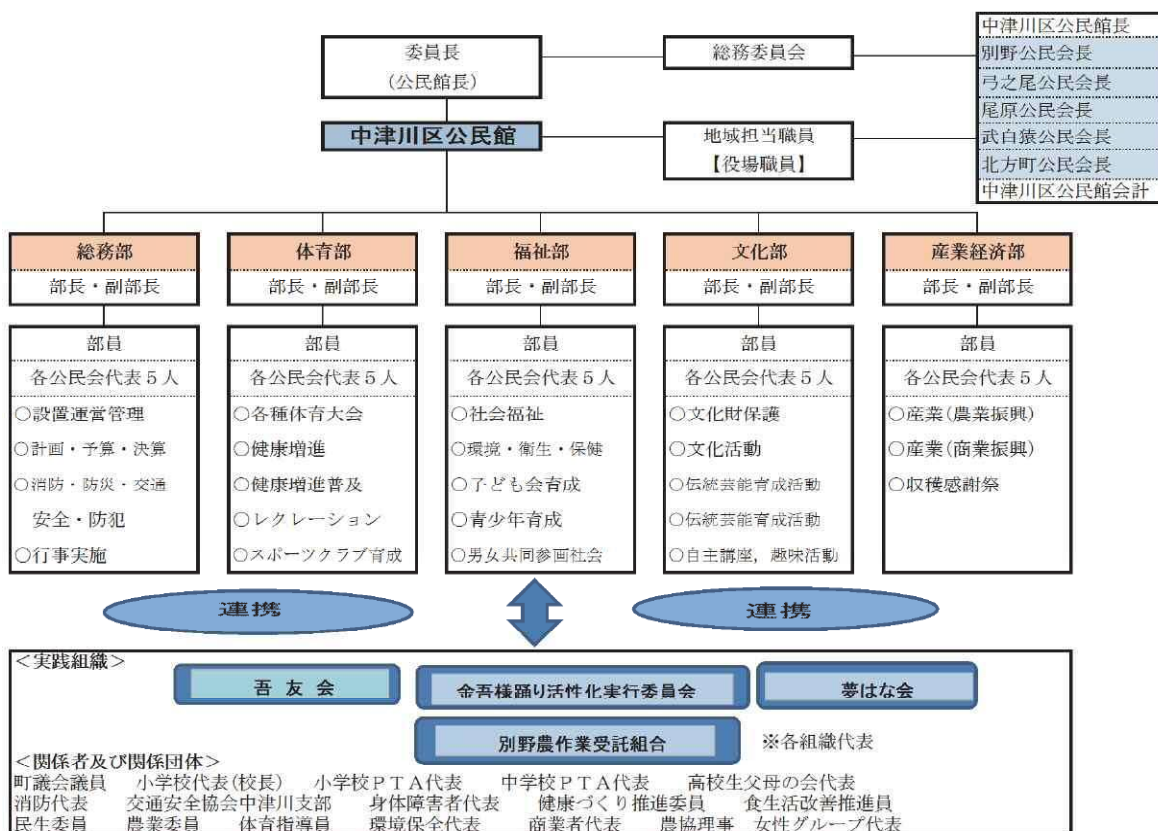


図4. 推進体制図

■むらづくりの特徴と優秀性

1. むらづくりの性格

本地区では、区公民館を中心として住民総参加の話し合いを進め、「大念仏踊り」の復活などを住民の総意として盛り込んだ「地域づくり活性化計画」を策定し、農業者団体、青年・女性グループ等と連携を図りながら実践活動を行っている。このことで、住民が地域への誇りと愛着心を蘇らせ、若者の地域への定着やUターン者の増加、地域の活性化や農業振興につながり、世代間の絆を強めている。

2. 農業生産面における特徴

（1）鹿児島県の普通期水稻を支える種籾生産

本地区は、昭和30年に鹿児島県の種子生産、45年には普通期水稻の採種地の指定地域となった。45年に設立された「中津川採種生産組合」は、半世紀にわたり県内の普通期水稻の種籾全てを生産・供給している。

全国的には1産地1品種に絞る種籾産地が多い中、本地区では8品種もの種籾の生産を担っており、組合員は責任感と誇りをもち、組合員総意による管理を行っている。このため、発芽勢の高い優良種子生産に向けて、一生産者一品種体制の徹底による育苗時の混種防止、ほ場での異茎株の抜き取りなど異品種の混入防止に細心の注意を払いながら、基本技術を徹底し、平成29年度は組合員32人が水田78haで種籾を生産し、1.1億円（水稻全体の48%）の生産額を上げている。

（２）肉用牛女性組織「牛々^{ぎゅうぎゅう}さつまおごじょの会」の結成

畜産経営農家も多い本地区では、近年経営を始めた女性農業者もおり、「もっと良い牛を生産するために、女性が集い、学ぶ機会が欲しい」という声が聞かれていた。そこで平成 29 年、地区の肉用牛農家女性リーダーが中心となり、近隣地域の肉用牛農家女性とともに 13 名で「牛々さつまおごじょの会」を発足させた。

これまで、体系立てて畜産技術を学ぶ機会がなかった女性たちが、繁殖技術、子牛育成管理などの基本技術を学んだり、新規就農者や若手肉用牛農家との合同研修会の開催など経営に関する資質を高めるとともに、女性農業者が相互に経営や家庭の悩みを語り合うなど、組織が交流や情報交換の場となっている。



写真4. 肉用牛の栄養管理等について学ぶ

（３）農業生産を継続する体制づくり

本地区における農業就業人口の 65 歳以上の割合が 68.8%（平成 22 年農林業センサス）となり、将来の農業の担い手や農地の維持などに不安を抱えるなか、地区内の別野集落では、23 年に別野農作業受託組合を設立した。高齢農家等からの依頼を受け、田植えや稲刈りなどの農作業を請け負っており、29 年度には集落の水田の約半分の 11ha を受託している。さらに、農家や自営業等の青年が 25 年に結成した「吾友会」は、地区内で人手が不足している農作業、水路清掃、草刈りなどの作業を支援している。

（４）「なかつこ日曜朝市」を拠点とした直売・交流活動

「大念仏踊り」の復活がきっかけとなり、地域の子どもから高齢者まで一同に集まる機会を作り、地域内外の交流を図りたいと、産業経済部を中心に平成 23 年から月 1 回、野菜や加工品を直売する「なかつこ朝市」に取り組んでいる。

地域の間伐材などで手作りの常設施設を建設し、住民に対して出品呼びかけのチラシを配布し、参加を促している。平日は無人販売所として開設され、高齢農家等の収入確保や生きがいのつくりとともに、地域の高齢者が集うサロンの役割も果たしている。



写真5. 賑わう「なかつこ朝市」

3. 生活・環境整備面における特徴

（１）「大念仏踊り」復活に向けて青壮年層が結束

本地区の活性化のために「大念仏踊り」の復活を図ろうと集った青壮年は、昭和 30 年当時の踊り手であった各集落の高齢者に相談したところ、半世紀も前の踊りの詳細は記憶が不鮮明で、復活は厳しいと難色を示された。

また、30 年には多額の準備金を使い、全世帯から総勢 500 人のキャストを要したと言われる「大念仏踊り」は、資金集めと人集めが必要で、地域の心を一つにして取り組むことが不可欠であった。そこで、各集落から集まった青壮年の有志 11 人で平成 15 年、「金吾様踊り活性化実行委員会（以下「実行委員会」という。）を結成した。中津川の無形文化財を後世に引き継がなければという強い想いで当時の踊り手に何度も足を運び、

ようやく協力を得られるようになり、踊りの「いわれ」を聞きながら振り付けの練習が始まった。

(2)「大念仏踊り」の復活と地域の結束

「実行委員会」が活動を始めて7年後の平成22年、大石神社秋季大祭で48番ある「大念仏踊り」の一つである「^{じわりまい}地割舞」の復活が実現した。55年ぶりの「地割舞」は、中津川住民としての誇りも復活させ、15年には100人だった観客数は22年には1,400人にまで増加・回復した。

この間、大石神社の環境整備や社務所の建設など地域総ぐるみで取り組むとともに、秋季大祭当日は産業経済部を中心に地元の農産物や手作り加工品等の販売を行うなど、踊りを見に来る地域外の観客を意識した取組を行うようになった。

平成28年には61年ぶりに「^{ちごまい}稚児舞」が復活。30年度は難易度の高い「^{ぼううちまい}棒打舞」の復活に向け、住民一丸となって練習や道具等の製作に取り組んでいる。衣装や道具、ポスター製作等はそれぞれ得意とする住民や地区出身者からの協力を得るとともに、「金吾様踊り」の賛同者には名入れした幟を1本2,500円で販売しており、皆が大祭に参加している雰囲気を作り出している。

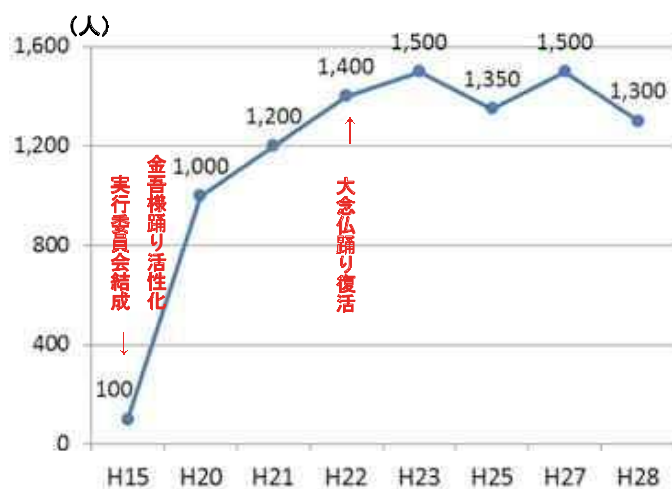


図5. 金吾様踊りの観客数の推移

注：記録がない年は台風などによる中止の年など



写真6. 55年振り復活「地割舞」(左)、61年振り復活「稚児舞」(中央)、金吾様踊り賛同者の名前入り幟(右)

(3) オリジナル焼酎「金吾さあ」の商品化による継承活動の財源づくり

「実行委員会」が地域に働きかけ、平成19年から地区内の遊休農地を利用してさつまいもを栽培し、独自の焼酎「金吾さあ」を製造・販売している。植付、収穫は保育園や子ども会と一緒にいき、町内の酒造会社に委託し、焼酎「金吾さあ」1,000本を製造、さつま町内の5店舗で販売している。1本2,400円で販売される焼酎「金吾さあ」のうち200円は「金吾様踊り」の協力金として自主財源としている。



写真7. 住民総出で焼酎用いもを植付

焼酎「金吾さあ」は平成 21 年に商標登録され、28 年からは町のふるさと納税の返戻品としても活用されるなど地域の特産品となっている。

表 1. さつまいも栽培、販売実績

年 度	20	21	22	23	24	25	26	27	28
さつまいも栽培面積（単位：a）	40	20	30	20	20	15	15	20	20
販 売 金 額 （単位：千円）	595	234	377	265	222	151	173	361	292

（４）地域を担う青壮年の結集と活動

「実行委員会」のメンバーが、「過疎が進む地域を何とか盛り上げたい」と平成 25 年に「吾友会」を結成した。農家、自営業等からなる 20 人で、「金吾様踊り」の担い手、中津川交流館の清掃、校区案内看板製作、小学校との交流活動、オリジナル焼酎の製造を委託している酒造会社のイベント支援、世代間交流事業の企画運営、町が主催する婚活イベントへの参画等に取り組んでいる。

本地区では、「地域づくり活性化計画」を策定した平成 6 年から 30 年までに、世帯主が 20～30 歳代の U ターン移住者が 12 世帯・44 人になっている。I ターン移住も含めれば 18 世帯・67 人になっている。吾友会が結成された 26 年以降も同世代の 6 世帯が U ターンし、5 人が加入している。



写真 8. むらづくりを担う若手グループ「吾友会」

（５）地域を担う女性の結集と活動

「吾友会」の結成と同じ頃、地域の女性が気軽に学び交流できる場を作ろうと、平成 21 年、地区内の女性の有志 14 人で「夢はな会」を結成した。

会員は、特産品開発等の先進事例研修の実施や毎年 11 月に行われる区の収穫感謝祭等で、手作り加工品の振る舞い、地域農産物の新たな食べ方の研究などに取り組むとともに、地区の運営委員として地域の方針決定の場に参画し、地域の活性化に貢献している。



写真 9. 女性グループ「夢はな会」

（６）地域ぐるみの高齢者見守り活動

地区内では 79 戸が独居老人世帯となっており、他出した出身者から安否確認の相談もあった。そこで、独居老人が「元気」であれば玄関先に黄色い旗を立てる「安否確認」の取組を開始した。

高齢者が毎朝外に出て旗を立てるという取組により、近隣住民や通学途中の子どもたちと会話をする機会が増えるなど、地域ぐるみで高齢者を見守る体制が図られつつある。

農林水産大臣賞受賞

おのだに
小野谷行政区かま
(福岡県嘉麻市)

～“みんなが主役”中山間のむらづくり いろいろな住民組織が大活躍～

■地域の沿革と概要

小野谷集落は、福岡県中央部の嘉麻市の南に位置し、平成 28 年日本山岳遺産に認定された「嘉穂アルプスの主峰」馬見山（978m）に抱かれ、青く田畑の広がる美しく小さな山里である。標高 100m 前後の中山間地域の純農村地帯で、遠賀川の支流である小野谷川の澄んだ水が流れ、古くから良食味の水稲栽培が行われてきた地域である。



図 1. 位置図

1. むらづくりの動機・背景

(1) 農業基盤の整備

小野谷集落は、古くから農業が盛んで、水稲を中心とした営農が行われてきたが、農地が矮小で農作業には多くの労力を必要としていた。そこで農業の生産性向上を目的に、昭和 57 年に県営圃場整備事業を活用して、ほ場の拡大に取り組んだ。

平成 2 年からは、集落の全農家が参加する「小野谷農事区」において、農家の組織化、水稲の共同育苗施設の設置、野菜等の特産品の研究、農業機械の共同化、獣害対策、畜産農家と耕種農家の連携など、地域農業全体に関する検討を開始した。

平成 3 年には、早期米生産団地を形成するため「共同育苗組合」を設立し、育苗作業の効率化を進めた。7 年には「小野谷農事区第一機械利用組合」を設立し、福岡県中山間地域活性化特別対策事業でトラクターとコンバインを導入し水稲生産の低コスト化に取り組んだ。さらに、12 年に中山間地域総合整備事業により、農地の大区画化等を行った。



写真 1. 小野谷集落から望む馬見山

(2) 持続的な営農体制

ほ場整備と機械利用組合の設立により生産基盤は整ったが、農地の利用集積や農業従事者の高齢化及びシカ、イノシシ被害などの課題は残った。農事区では平成 18 年 2 月に集落営農に関する意向調査を実施したところ、高齢化や病気、後継者の不在、耕作放棄地の増加に対する不安が出された。このままでは、農業生産力の減少だけでなく、地

地区データ

①所在地：福岡県嘉麻市
③総人口：208 人
⑤農家戸数：23 戸

②地区の規模：1 集落
④総世帯数：74 戸
⑥主要農産物等：水稲

※③④は H30 年時、⑤は 27 年時

域全体の活力の低下が懸念された。

そこで農事区では、今後の地域農業の維持について話し合いを重ね、営農組織の検討を進めた。その結果“小野谷の農地はみんなで守っていく”ことを理念に平成19年2月に「小野谷営農組合」が設立された。この組織の設立と活動が、その後のむらづくりに大きく影響を与えた。営農組合は23年6月に「農事組合法人小野谷の郷」へと移行した。



写真2. 組織化のための合意形成

(3) 地域全体で取り組む“むらづくり”と組織づくり

今後の小野谷集落の維持発展のために、農家だけでなく行政区全体で検討を繰り返した。昔から、「小野谷は人材の宝庫である。左官さん以外はみんないる。」と言われており、現在でも建設業、運搬業、銀行員、警察官、消防士、教師、役場職員など多様な職種の住民がいる。それぞれが自分の経験を活かしながら、むらの将来を考えた。

その中で、住民である市役所職員から、農地・水・環境保全向上対策の情報提供があり、これをきっかけにして集落内の施設や自然環境を維持・継続していくために、平成19年に「小野谷農村環境を守る会」を設立した。

獣害対策については、シカやイノシシが日中でも集落内の庭先や道路に出没し、農作物への被害だけでなく、住民の自家用車との事故など生活環境にも大きく影響するようになっていた。の問題に集落全体で取り組むため、「小野谷集落協定組合」や「猪鹿対策協議会」などを設置し、防護柵や捕獲等の対策をとってきた。

このように、平成19年の小野谷営農組合設立がきっかけとなって、それぞれ目的を持った組織を次々に設立することで、みんなでむらを守っていこうという“むらづくり”活動の機運が高まってきた。

2. むらづくりの推進体制

小野谷行政区は、小野谷集落の74世帯（全戸）が加入する組織で、役員は区長、副区長、会計と9名の隣組長等で構成されている。行政的な業務のほかに、高木神社の神事や伝統芸能の保存など、住民同士のコミュニケーションを図る活動を行っており、むらづくりの基盤となっている組織である。

小野谷農事区（以下「農事区」という。）は、行政区長の業務が多様化するなか、平成2年7月に行政区とは別に地域農業の全般に関する情報の連絡・調整のために設置された組織で、全農家が参加している。

農事組合法人小野谷の郷（以下「小野谷の郷」という。）は、構成員40人、経営面積35.4haの農事組合法人で、大型機械を所有し、省力的な水稻作を行っており、むらの営農の中心的組織である。組織内は、栽培班、女性班、オペレーター班に分かれ役割分担を行っている。

小野谷集落協定組合（以下「集落協定組合」という。）は、耕作放棄地対策を目的に設置され、小野谷の郷と連携しながら、農地や環境の保全に取り組んでおり、獣害対策では約16kmの防護柵を設置し、維持管理を行っている。

小野谷農村環境を守る会（以下「農村環境を守る会」という。）は、農地及び農業用施設等の適切な保全管理、地域の環境と自然景観の維持・継承を目的に設立。農家・非農

家で構成され、多面的機能支払交付金を利用して活動している。

小野谷あじさい愛好会（以下「あじさい愛好会」という。）は、集落の景観を美化し、環境美化意識の啓発、住民の一体感の醸成及び会員相互の交流促進を図ることを目的として平成 19 年に発足。

小野谷を災害から守る会（以下「防災から守る会」という。）は、近年、地震や豪雨による災害が多発していることから、平成 28 年 6 月に自主防災組織として設置し、活動を開始している。

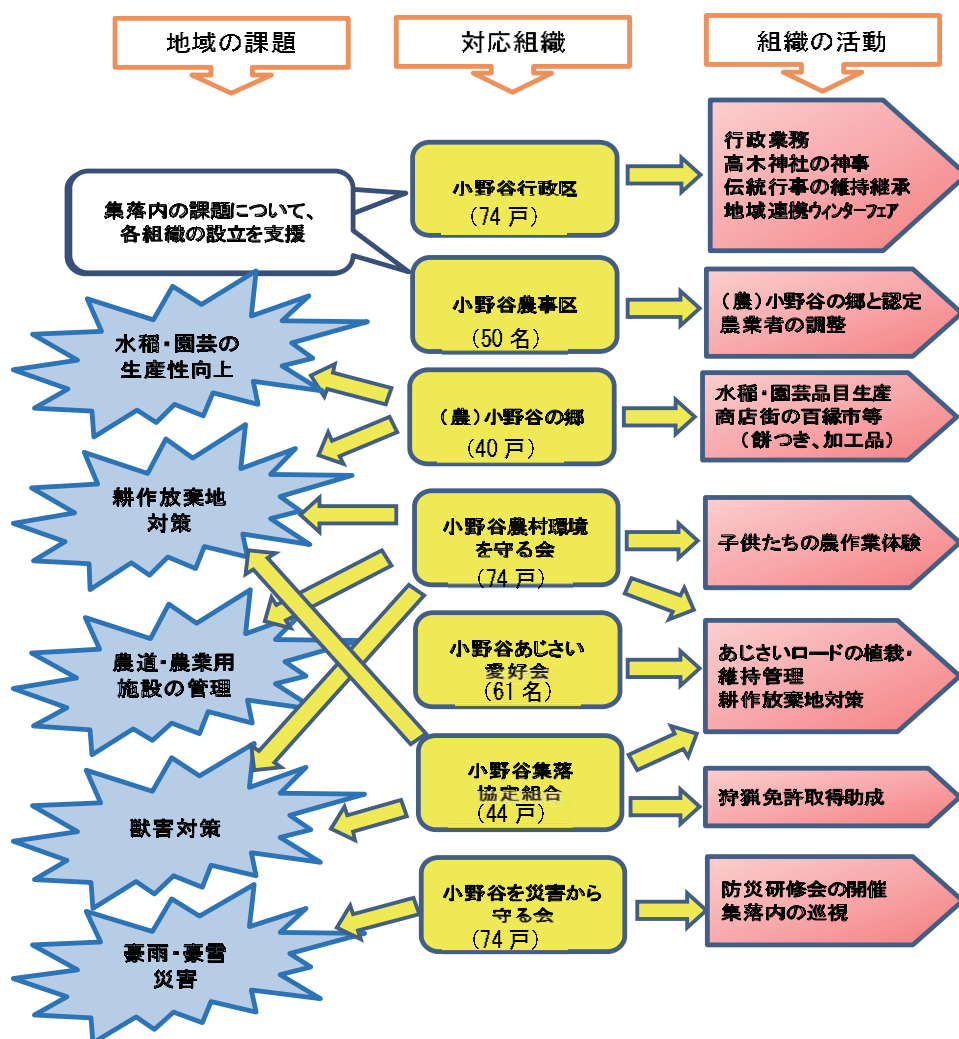


図2. 推進体制図

3. むらづくりの農林漁業面への寄与状況

(1) 法人を核とした農業生産

集落内の農業生産は、小野谷の郷と 4 名の認定農業者が担っており、農事区が農地等の調整を行っている。

小野谷の郷の設立にあたっては、集落内で幅広く意見を集約するため、世帯主だけでなく若手や女性を含めて検討を進めた。そのため、設立当初は役員に女性も参加していた。そして、福岡県水田農業経営力強化事業により大型機械を整え、農作業をより効率的に行うために話し合いを繰り返し、農地中間管理事業を活用して集落内の農地の 60% を集積した。法人内部の栽培班は、作付け及び栽培計画の策定、栽培全般の管理を行い、

オペレーター班は、田植え、防除、収穫等の機械作業を担当している。女性班は、水稻栽培の軽作業と新規に導入した園芸品目（シンテッポウユリ、タカナ等）の栽培管理を行っている。

水稻栽培では、作付面積を維持しながら農業機械の所有台数を減少させ、水稻の低コスト生産を実施し、中山間地でありながら、法人の管理する農地は、耕作放棄地は皆無である。

収入金額は、売上と交付金等で3,000万円程度を確保しており、うち園芸品目と加工品販売は200万円程度である。また、法面管理の省力化を目的に、センチピードグラスの吹付けの展示ほを設けている。さらに、組織内の人材育成のため、定年帰農のオペレーターには、大型特殊免許取得のための助成を行っている。平成23年の設立後、組合長は3代目となり、世代交代も進んでいる。

（2）新規品目へのチャレンジ

小野谷の郷は法人化の前から、集落内の女性や高齢者の能力活用を目的に様々な新規品目に取り組んできた。ニンニク、キャベツ、シンテッポウユリ、大豆等の栽培を行ってきたが、獣害により栽培を断念してきた品目も多い。平成24年からは近隣の畜産農家と連携した飼料用稲の栽培を拡大している。

小野谷の郷は、集落内の農地だけでなく近隣の集落からも農地の集積が増えており、今後の組織活動の拡大と永続性のため、新たな栽培品目の導入や施設整備、従業員の雇用などを計画している。

（3）女性の力を活かした生産活動

小野谷の郷の設立から当初の運営には、女性役員が参画しており、その意見が反映されている。なかでも園芸品目の栽培と加工所は、女性や高齢者の活躍の場である。シンテッポウユリは、定植、出荷調整は女性や高齢者、耕うん等の機械作業や収穫作業は男性と役割分担して栽培している。構成員全員のそれぞれの適性に応じた農作業への参加を心掛けている。

また、加工施設では、集落内外のイベントの時に、早朝からあんこ餅を生産し、女性や高齢者の安定した収入源となっている。



写真3. 女性参画によるシンテッポウユリの定植

（4）集落一丸となった獣害対策

シカ、イノシシによる農作物への被害の増加に対し、水田周辺にトタンや防護網を設置してきたが、被害はなかなか減少しなかった。そこで、平成23年に猪鹿対策協議会を設立し、総延長16kmにも及ぶワイヤーメッシュ防護柵を2年間かけて、すべて自主施工した。

集落協定組合は、農村環境を守る会と協力し、設置した防護柵の維持管理のための土砂除去や草刈り、防護柵の補修作業を年間通じて行っている。また、住民の狩猟免許取得の支援を行い、箱ワナによる捕獲なども行っており、獣害による損害は年々減少している。



写真4. ワイヤーメッシュ防護柵の設置

4. むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

(1) アジサイや桜の植樹による景観の維持管理

集落の環境を守る活動として、草刈りや獣害対策に取り組んできたが、もっと住民のために積極的な活動はないかと検討し、各地のむらづくり活動の視察研修を行っていた。「美の里づくりコンクール」で農林水産大臣賞受賞した宮崎県美里町を視察研修した時、中山間地域のあじさいロードに感動し、ぜひ小野谷集落でも取り組もうと、非農家を含めたあじさい愛好会が発足した。

あじさい愛好会は、集落入口の市道沿いにアジサイ苗1,200本を植栽した。その後も毎年300本を植栽し、現在、20品種4,000本となっている。農村環境を守る会や集落協定組合と協力し、年間7回の下草刈りとアジサイの剪定作業を行い、地域住民一人ひとりが協力して大切に育てている。

最近では、ホームページ「あじさいロード」で、各品種の写真や開花状況を紹介しており、梅雨時期には集落内外から多くの人が見学に訪れる。

また、平成23年からは、基盤整備した畦畔に桜の植樹を開始した。これは、集落内の景観の維持とともに、畦畔の草刈り作業を軽減させる目的で整備している。

アジサイの植栽を続け、ゆくゆくは一万本のアジサイが色とりどりの咲き誇る集落にし、地域住民全員が参加し、都市部からも参加者が来るようなアジサイ祭を計画している。



写真5. あじさいロード



写真6. 桜並木

(2) 集落で取り組む防災

平成28年4月14日に熊本地震が発生し、29年7月5日に九州北部豪雨災害が発生した。特に九州北部豪雨災害は、小野谷集落の馬見山の南側に位置する朝倉市、東峰村において、土砂や流木が集落全体を押し流し、甚大な被害が発生した。小野谷集落でも24年には、豪雨により小野谷川があふれている。

集落の高齢化率は44%、1人暮らしの高齢者24人であり、災害から守る会では、平成28年度福岡県避難行動要支援者避難支援事業を活用し、専門家による研修会を行い、避難経路や避難行動要支援者の対応などに取り組んでいる。また、豪雨災害対策として、定期的に小野谷川の流木や土砂の除去作業を行っている。

近年、1～2月にかけて大雪に見舞われ、積雪量は10cm以上となり雪のため外出のできない世帯も多く見られた。災害から守る会の役員は地元消防団とともに、集落内を巡視し住民の安否確認を行うとともに、トラクターにフロントローダーを付けて除雪作業を行うなど、住民が安心して安全に暮らせる“むらづくり”に取り組んでいる。



写真7. 避難経路、危険箇所の確認作業

（３）伝統文化の継承

集落内の高木神社は、『福岡県神社誌』によると「天徳二年（958年）の銘文に、此の地は往古英彦山神宮の神領地で、彦山四十八大行事社（英彦山周辺の高木神社）の中で本社はその首班であり、弘仁年間（810～824年）に僧羅連が創立した。」と記されている。

元旦祭、春祭り、秋祭りには、芸能保存会や子供会による「獅子舞」などが披露される。また、子供会の「鬼火焚き」や「五穀神の奉納相撲」など地域文化継承の行事も行われている。

これらの行事には、地域住民はもとより、地区外に出ている子供や親せき等も帰省しにぎやかに過ごしている。地域の伝統文化の継承や自然環境の保全、住民の安全・安心を守っていく活動など、さまざまな行事には、むらから離れた人たちも「むらを忘れがたくて。」と帰ってきている。



写真8. 伝統芸能保存会の獅子舞

（４）都市住民との交流

① 小野谷の郷による餅つき

小野谷の郷は、隣町の飯塚市の本町商店街において、偶数月 15 日に開催される百縁市で年間 5 回の餅つきの実演販売を行っている。商店街側からの依頼により、平成 23 年から実施しており、「甘くて、粘りがあっておいしい。」と好評で固定客もついている。この日は、女性部は早朝から加工場であんこ等の準備を行い、商店街では売り子として活躍している。また、嘉麻市内の直売所や祭り等でも販売をしており、年間 8 回の餅つきを行っている。また、昔は各家庭で行っていた餅つきも、高齢者家庭では困難となったため、毎年 12 月 28 日には正月用の餅つき作業を請け負っている。



写真9. 飯塚市百縁市での餅つき

② 幼稚園児の農業体験

農村環境を守る会は、太宰府市の幼稚園より農業体験を受け入れている。園からは親子で約 70 名参加し、田植え・稲刈りやサツマイモの定植・収穫などを体験させ、農業の大切さ、自然環境の素晴らしさなどを伝えている。

③ 大学との連携による地域活性化

平成 26 年度から、近畿大学産業理工学部（飯塚市）と地元集落及び嘉麻市で地域資源活用プロジェクト協議会が設置された。これは、大学生達の若いアイデアと地域の伝統や文化を融合し、地域の活性化を目指したもので、廃校となっている旧宮野小学校跡地を利用して活動している。この協議会には、小野谷集落から 4 名の運営委員が参加しているほかに、旧宮野村の桑野、宮吉、上の集落が参加している。

主な活動は、毎年「地域連携ウィンターフェア宮野」として、大学の吹奏楽部と地元の獅子舞や太鼓のコラボレーションでコンサートを開催するなど、大学と地域住民が創り出す新しい地域活性化の取り組みである。



写真10. 地域連携ウィンターフェア宮野

農林水産大臣賞受賞

やきはた そ ば く ら ぶ

焼畑蕎麦苦楽部

(宮崎県東臼杵郡椎葉村)

～山は友達・命の源 続けることが力～

■地域の沿革と概要

焼畑蕎麦苦楽部が活動する宮崎県椎葉村尾向地区は、
 村の中心部から西へ約20km、急峻な山道を車で1時間ほどの熊本県境に位置し、標高500mから1,000mに4つの集落が点在する山間地域である。

九州中央山地国定公園の山々に囲まれ、先人達が繋いできた豊かな森林資源と共生し、子どもから大人までが世代を越えて繋がりあい、伝統農法である焼畑農業、神楽や民謡等の伝統文化、伝統的な郷土料理等を維持継承してきた地域である。

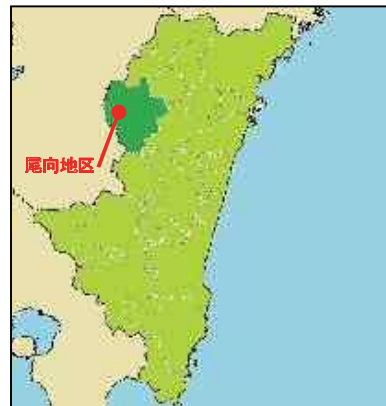


図1. 位置図

1. むらづくりの動機・背景

時代が急速に変化する中、椎葉村のような中山間地においても「人と人との繋がり」が少しずつ希薄化し、集落形成に欠かすことの出来ない相互扶助の精神である“かちゃ〜り”（語源は「貸し借り」）と呼ばれる集落内の共同作業が姿を消そうとしていた。

これらの原因は農作業等の機械化によるところが大きいと言えるが、中山間地の重要な資源である「先人達の知恵」と「先人達が守り繋いできた伝統」を大切にしていかなければならないという危機感が、焼畑蕎麦苦楽部（以下、「苦楽部」という。）設立のきっかけとなった。

苦楽部は平成20年4月1日に設立され、当初は苦楽部代表の想いに賛同する集落内の近隣住民5世帯6名の男性のみでスタートした。代表の想い・理念は、「山は友達・命の源～続けることが力～」である。

活動のメインに据える「焼畑」は、「楽しく」そして「苦しい」共同作業であることから、組織の名称は「焼畑蕎麦苦楽部」と命名された。

“かちゃ〜り”により焼畑を守り、伝統的な食等を継承する活動は、次第に集落住民を繋げ、活動に魅了された村内外のファンの応援・協力に繋がり始めた。



写真1. 伝統農法「焼畑」の火入れ



写真2. 苦楽部のPR旗

地区データ

①所在地：宮崎県東臼杵郡椎葉村
 ③総人口：451人
 ⑤農家戸数：81戸

②地区の規模：4集落
 ④総世帯数：153戸
 ⑥主要農産物等：水稻、ミニトマト、そば、シイタケ、木材

※③④はH30年時、⑤は27年時

2. むらづくりの推進体制

(1) 組織体制と会員

現在、苦楽部の会員は9名、サポーター2名の11名である。農家、林家、サラリーマン、公務員（現役・OB）、主婦、移住者で構成され、うち女性は4名で年齢も30代から60代と幅広い。代表並びに副代表は60代、事務局は30代と40代の若手が担っており、多様な分野のメンバーがそれぞれ職を持ちながらも助け合いの精神で活動を行っている。

(2) 他団体との連携・協力

地区内には、神楽保存会や地域のボランティア活動等を行っている向山日添同志会など様々な団体が存在する。人口約450名の小さい地区であるため、地区住民同士が密接に繋がり顔見知りである。各種事業やイベントについては、地区内における普段の生活の中でも意思疎通がなされ、焼畑の火入れ（8月の晴天の日に実施）においては、地元消防団や青年団、地域おこし協力隊等が協力するなど連携が図られている。

また、昭和63年から約30年にわたり焼畑体験学習を毎年行っている地元の尾向小学校や、苦楽部の理念・活動に影響を受け、新たに村内外で焼畑農業に取り組む方々とも情報交換を行い、技術指導や作業の相互支援等を行っている。

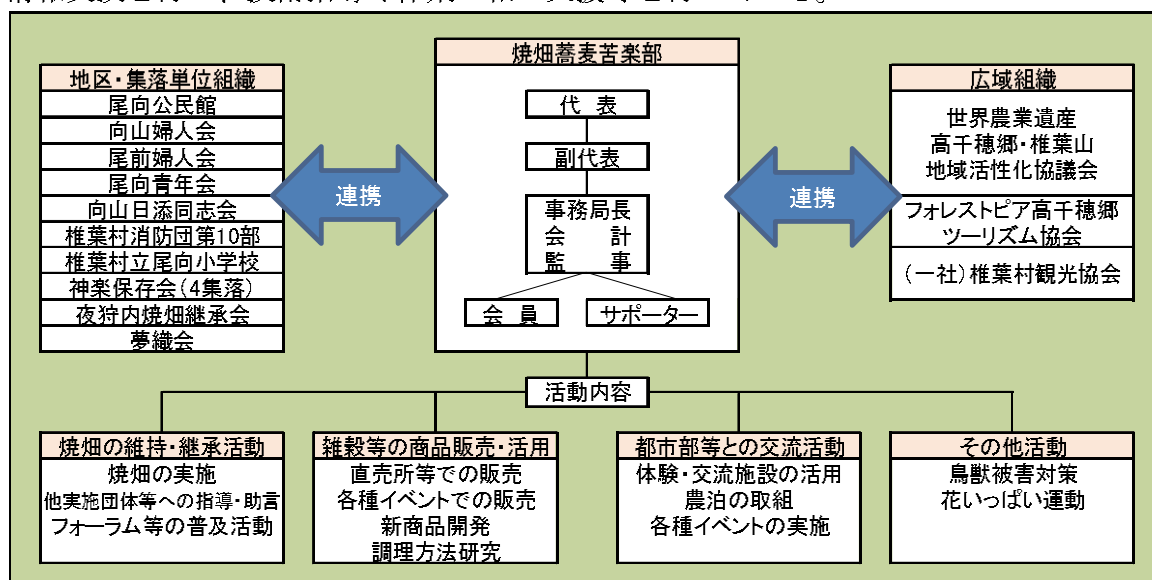


図2. 推進体制図

3. むらづくりの農林漁業面への寄与状況

(1) 伝統農法「焼畑」の継承

焼畑は、平地が少なく水の確保が困難な山間地等において、山を畑とみなし生きていくために行われてきた農薬や化学肥料等を一切使わない究極の自然農法である。昭和30年代には全国各地で行われていたが、苦楽部が発足した平成20年には代表宅の1軒のみで生業として続けられているのみであった。代表の両親である先代は、30年前に「民宿焼畑」を開業し、民宿を営みながら焼畑の魅力等を伝え続けてきたが、それを引き継いだ代表は苦楽部設立による組織的な実施など、より発展的な焼畑の普及、継承活動を実践している。

「焼畑」は、平成24年に椎葉村の文化財指定を受け、27年には「椎葉の焼畑」として宮崎県の無形民俗文化財に指定された。

（２）世界農業遺産の認定

椎葉村を含む高千穂郷・椎葉山地域（３町２村）は、古来から継承してきた農林業の営みなどが後世に残すべき「山間地農林業複合システム」として評価され、平成 27 年 12 月に国連食糧農業機関（F A O）から世界農業遺産に認定された。焼畑の継承も認定を受ける際の大きな評価要素となり、その魅力を世界に発信することができた。

世界農業遺産の認定は、焼畑継承に取り組んできた苦楽部会員や尾向地区の大きな自信と誇りに繋がり、国内外からの来訪者の増加など様々な部分で高千穂郷・椎葉山地域全体の活性化に繋がっている。

認定後の 28 年度、椎葉村では「焼畑研究会」を開催するとともに、焼畑の映像（日本語、英語）や普及啓発冊子『椎葉の焼畑』を製作し、その知識や技術の資料化に取り組んでいるが、いずれにも苦楽部が深く関与している。

※映像 日本語 <https://www.youtube.com/watch?v=2pWOMr2cc3k>

英 語 <https://www.youtube.com/watch?v=5G3chmXCQAI>



図3. 高千穂郷・椎葉山地域の山間地農林業複合システム

（３）焼畑の広がり

温暖化等が原因とされる地球規模での異常気象が発生する中、伝統農法である焼畑を見直す動きが日本各地で見られている。平成 29 年 3 月、椎葉村において第 1 回焼畑フォーラムが開催された。7 県の 7 団体から取組について事例発表が行われ、焼畑が全国に広がっていることがうかがわれた。

世界農業遺産認定の翌年となる 28 年には、村内の上椎葉地区で夜狩内焼畑継承会（以下、「継承会」という。）が結成された。継承会による焼畑は、同地区において 50 年ぶりの復活となり、多くのマスコミ等が訪れ地区の活性化に繋がった。苦楽部も準備段階から火入れ等の指導にあたり、焼畑復活の機運醸成を図り焼畑仲間の誕生に大いに歓喜した。29 年には、村内のむらおこしグループ「夢織会」や個人農家による焼畑が行われるなど、焼畑の広がりが見られるとともに相互の連携や協力、一体感が生まれてきている。

さらに、椎葉村に隣接する熊本県水上村にも焼畑が広がっている。水上村には 10 年以上前から多くの移住者が暮らしているが、苦楽部の代表は、その移住者との交流を 3

～4年前から行っている。水上村の移住者は、椎葉村の焼畑の火入れ等へ毎年参加しており、苦楽部も“かちゃ〜り”返しとして水上村での焼畑の指導という形で参加している。焼畑をきっかけに、相互の交流を図り、多くの方との繋がりを求めて水上村と椎葉村での人の交流が盛んになっている

(4) 商品販売・開発

苦楽部では、村内最大のイベントである「椎葉平家まつり」をはじめ、村内外の各種イベント等に積極的に参加し、焼畑で栽培される雑穀等を販売している。また、最近では、自然豊かな尾向地区に自生している桑の葉やよもぎを使ったお茶商品のパッケージリニューアルや、雑穀を活用したクッキー・クラッカー等の新商品開発、体験活動の受入にも精力的に取り組んでいる。商品販売や新商品開発等は、女性会員4名が中心となって行っており、ヒエ粥など雑穀を使用した伝統料理の調理方法を60才代の女性会員が若手会員に指導し、若手会員は雑穀等の新たな活用方法を検討するなど活発に活動を行っている。

平成29年1月には、大阪で試験販売を行い、購入者へのアンケートを実施するなど都市部でのマーケティング活動を実施した。その結果、雑穀は若い世代はもとより中高年層においても料理方法が知られていないということが分かり、今後の商品販売等における大きな収穫となった。

また、苦楽部の新たな取組としては、炭焼き窯とピザ窯を作り、炭焼き体験や木炭の販売等を計画している。



図4. 商品販売額の推移

【主な販売商品】

よもぎ茶, 桑の葉茶, そば粉,
小豆こうせん, しそ千枚漬け,
大豆梅漬け, 蕎麦の実,
あくまき, もち類, はったい粉

【最近の新商品】

あわクッキー, よもぎクッキー,
山桑の葉クッキー,
蕎麦粉クラッカー,
ひえクラッカー

(5) 鳥獣被害対策

尾向地区は、椎葉村内では鳥獣被害が比較的少ない地域であるが、地区内の向山日添集落では、イノシシによる水稻やタケノコの被害が増え、喫緊の課題となっていた。イノシシによる被害は昔からの課題であり、特に焼畑で栽培するソバは格好の餌となるため、先人達は様々な方法で「かじめ（被害防止対策）」を行ってきた。苦楽部では、動物たちの住み処となる山が荒れ、豊かな森では無くなったことが鳥獣被害の大きな原因であると感じていた。

そこで、苦楽部では焼畑を行った森に栗を植栽しイノシシの餌場を提供することで、人里へのイノシシの侵入を防ごうと考えた。結果、集落内全体とは言えないが栗を植栽した周辺の水稲被害は大きく減少した。苦楽部は、「山は友達・命の源」の理念のもと、今後も杉やヒノキといった針葉樹だけではなく、栗やヤマザクラ、カシ類といった広葉樹等の植栽の必要性を訴えながら、豊かな森を育む活動を展開していくこととしている。

4. むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

(1) 地元の小学校での焼畑体験学習

地元の尾向小学校では、昭和 63 年から焼畑体験学習が毎年行われている。かつて体験した小学生が今は親となっており、親子で体験学習に参加している。

地域の大人たちと学校関係者が一体となって組織する「焼畑実行委員会」(以下、「委員会」という。)は、尾向地区で育つ子どもたち全員に焼畑体験をとおして先人の知恵や苦勞を学ばせ、伝統を次世代に繋ぐことの大切さを伝える「ふるさと学習」を行うため、山の剪定から火入れなど様々な準備を行っている。

この焼畑体験学習には苦樂部が密接に関わっており、火入れの時期や防火帯となる火断^{かだち}の方法などあらゆる場面で指導や助言等を行っている。



写真3. 尾向小学校焼畑体験学習

(2) 体験・交流施設「焼畑粒々飯々」^{やきはたつぶつぶまんま}の設立

焼畑やソバ打ち等の体験プログラムを提供するため、平成 22 年、体験・交流施設「焼畑粒々飯々」を地区内に開設した。当該施設は、会員が所有する山林の木材を利用して、伐採から施工まで全て会員自らの手で作り上げたものである。この施設を活用し、村内外の小学校児童をはじめ、地元中学生や椎葉村の国際交流事業「椎葉村アジア友好の翼事業」で交流のあるシンガポールの学生、社会人など幅広い年齢層にソバ打ちや餅つきなど様々な体験プログラムを提供してきた。

近年、焼畑の火入れや体験交流には、合わせて年間 300~400 人ほどの参加者があり、都市部住民等との新たな交流が生まれることで、地区内の活性化や人材育成等に繋がっている。

施設内には昔からの道具が保管されており、今でも昔ながらの方法で茶・野草の釜炒りや、ヒエこうかし(ヒエの脱穀・製粉)が行われるなど、手法の継承にも取り組んでいる。



写真4. 体験・交流施設



図5. 体験・交流施設利用人数等の推移



写真5. 体験プログラムの提供

(3) 農泊の取組

平成 29 年度、苦楽部と連携して農泊等の取組を行っている「フォレストピア高千穂郷ツーリズム協会」が農林水産省の農泊推進対策事業を活用して「椎葉焼畑ツアー」を開催し、首都圏から 10 名が参加して焼畑の火入れを体験した。

また、「椎葉村秋のスタディツアー」として首都圏の 7 名を受け入れ、ソバ収穫やソバ打ち体験等も提供している。30 年度には「焼畑雑穀オーナー制度」の受入を開始し、焼畑を行った山でヒエやアワ等の雑穀を栽培し、それらを使った加工や料理の体験を提供することで、都市部住民との交流拡大や焼畑の普及に取り組んでいる。

これらの取組等が評価され、29 年度に「高千穂郷・椎葉山地域」が SAVOR JAPAN（農泊 食文化海外発信地域）に認定され、地域の食として「神楽料理」と「焼畑料理」が取り上げられた。これらの情報は、英文のホームページにて焼畑蕎麦の写真と共に、海外に向けて情報発信が行われている。

また、椎葉の民家は「椎葉型民家」と言われる独特の造りとなっており、平地が少なく奥行きがとれない地形の中で、横に長く冠婚葬祭や夜神楽も実施できるように襖を外すことで 1 つの部屋になるように造られている。

苦楽部では、会員が所有するこの椎葉型民家の空き家を活用して、長期滞在型観光の受け入れなど都市部住民との交流拠点、移住者とのふれあいの場を設けるための検討・準備を進めている。

(4) 花いっぱい運動の実施

集落内の道路沿いを中心に、桜、桃や紫陽花等の植栽を行い集落環境の整備を毎年実施している。地区内の村道椎葉・五家荘線は、椎葉村と熊本県八代市泉町を結ぶ観光ルートとなっており、村内外通行者の目を楽しませる景観形成に繋がっている。地区住民から感謝の言葉をかけられる場面もあり、苦楽部活動への意欲向上にも繋がっている。



写真 6. 焼畑雑穀オーナー制度活動



写真 7. 焼畑蕎麦

九州農政局長賞受賞

かみあまくさ

上天草物産館さんばーる出荷協議会

(熊本県上天草市)

～農林水産物直売所を核としたむらづくり～

■地域の沿革と概要

上天草市は、熊本県の西部・天草地域の玄関口に位置しており、平成 16 年 3 月 31 日に大矢野町、松島町、姫戸町及び龍ヶ岳町が合併して誕生した。ほぼ全域が雲仙天草国立公園に含まれる等、日本三大松島のひとつ松島の風景等、四季折々の美しさを有する景勝地である。また、美しい海と雄大な山々に囲まれており、海産物から農産物、畜産物まで幅広く一次産品が揃う食材の宝庫でもある。特に花きは生産額約 10 億円で、県内有数の生産地となっている。



図 1. 位置図

1. むらづくりの動機・背景

合併以前の旧大矢野町では、温暖な気候を活かした果樹・野菜・花き等の農産物が生産されていた。主な出荷先はJAのほか、市場等への直接出荷となっていたが、形の悪さ等で規格外となり廃棄されるものも多く、生産者の所得向上のためにそれらの活用が喫緊の課題であった。

このような中、地域の生産者から地域直売所の建設に対する機運が高まり、平成 12 年には町が漁業、花き農業等の特徴的な産業のほか、酪農や野菜、果樹等の物産販売を通して産業の振興に役立てる施設として「大矢野物産館」を建設した。また、同時にさんばーる出荷協議会（以下、「出荷協議会」という。）が 285 名の会員で設立された。

出荷協議会の設立にあたっては、異業種の生産者をまとめるため、大字単位で生産者への説明会や地域の産業団体との調整、住民とのワークショップ、ニーズを把握するアンケート調査を実施した。その後、大矢野町は近隣の 3 町と合併して上天草市となったため、大矢野物産館は 3 町の生産者を受け入れ、「上天草物産館さんばーる」（以下、「物産館」という。）に名称を変更した。



写真 1. 上天草物産館さんばーる

地区データ

①所在地：熊本県上天草市
③総人口：27,615 人
⑤農家戸数：894 戸

②地区の規模：上天草市全域
④総世帯数：11,685 戸
⑥主要農産物等：花き、野菜、柑橘類

※③④は H30 年時、⑤は 27 年時

2. むらづくりの推進体制

出荷協議会は、上天草市内に住所があり、自らが生産収穫した農林畜水産物加工品等を物産館へ出荷する会員で構成されている。現在の会員は456名。野菜部会、果樹部会、花き部会、水産部会、加工品部会及び特産品部会の6部会に分かれて活動をしており、課題となっていた生産者の所得向上に向けた売り先確保だけでなく、消費者ニーズにあった安心安全な商品を提供するため定期的に生産者同士で話し合いを重ねている。

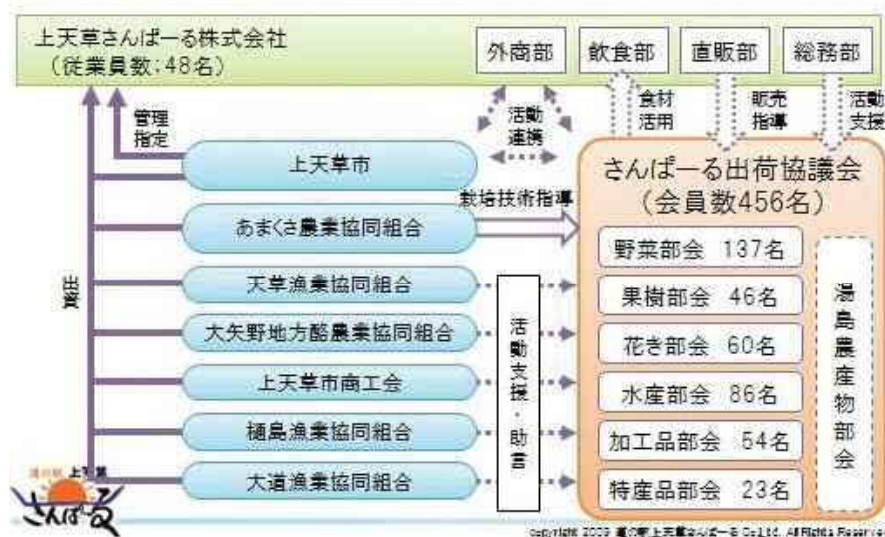


図2. 推進体制図

平成29年度には、若手会員（49歳以下）42名による青年部を設立し、業種を超えた連携体制を構築して以下の活動に取り組んでいる。

- ①地域産物のPRを目的とした移動販売を、他地域の物産館や直売所で定期的に開催
- ②消費者との交流を目的とした体験型イベントの企画立案及び実施
- ③都市圏の飲食店シェフや大手バイヤー等を対象とした生産現場の視察ツアー開催
- ④SNS等を活用した生産から出荷までの情報発信

3. むらづくりの農林漁業面への寄与状況

（1）農業生産・所得の向上について

出荷協議会は、売上を向上させるため年4回の定例会で各部会の売上を説明し、意識向上を図っている。また、各部会には3ヶ月ごとに各品目の販売数量の実績を説明し、栽培体系の改善につなげている。

その結果、商品全体の品質が向上するとともに、高品質な商品の展開や消費者への訴求力を意識した商品の栽培が行われる等、消費者ニーズへ対応する意識がより高まってきている。

こうしたことから、物産館の販売実績は右肩上がりであり、会員の平均販売額も概ね150万円と安定的な収入が確保できている。

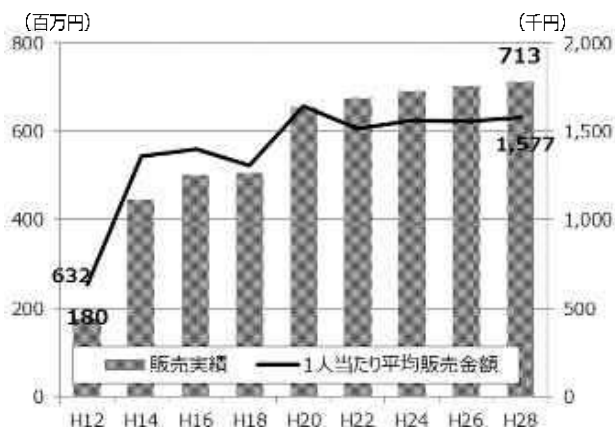


図3. 出荷協議会の販売実績及び平均販売額の推移

（２）地産地消と上天草産農林水産物の消費拡大に向けた取組み

出荷協議会では、時期によって出荷品目の偏りが見られたことから、出荷計画表による調整、野菜苗（かんしょ、オクラ、ナス等）の配布を行い、品揃えの確保に取り組んでいる。この結果、農林水産物販売における上天草地域からの出荷割合は全体の 85% を占めている。

また、地元農業女性グループが地場食材を使った郷土料理や農産加工品（がねあげ、手作りみそ、まんじゅう等）を常時販売し、素材や製法の P O P も掲示して、“上天草の味” の P R に努めている。

（３）女性・高齢者の参画と後継者の育成

出荷協議会は、女性会員が 196 名と全体の 43% を占め、商品づくりやパッケージング、店頭販売での P R 販売等、各部会で中心的役割を担っている。

また 75 歳以上の高齢者も 91 名と全体の 20% を占め、長年の知識や技術を活かせる新品種の作物の試験栽培に取り組んでおり、生産意欲の向上を図ることで生きがいをにつけている。

さらに出荷協議会では、市や農協等と連携して、就農希望者の受入体制の構築に向けて「農業・みらい・創造会議」を設立し、10 年後の農産物の出荷量確保と会員の確保・育成のための検討を行っている。これまでに新規就農者を 6 人受け入れ、地域の後継者として育てている。



写真2. 農業・みらい・創造会議

（４）地域在来品を活用した新たな特産品づくり

平成 24 年度、県認定くまもとふるさと食の名人の協力によりカンショの地域在来種（あめりか芋、人参からいも）を用いた地元の特産加工品「こっばもち」づくりに取り組んだ。

また、29 年度からは地元の酒造会社と連携してあめりか芋を用いた世界遺産登録記念のブランド焼酎づくりに取り組み、2 品とも商品化につながっている。



写真3. あめりか芋の焼酎「神秘の島」

（５）湯島大根の産地化と G I 取得に向けた活動

「湯島大根」は、離島の湯島地区で限定的に生産される長さ 60cm、重さ 2 kg 以上になる大きな大根である。生産農家が十数戸で生産量が少なく入手困難なため、平成 19 年頃からマスコミに取り上げられるようになったが、生産農家は高齢化や連作障害による品質低下により産地として危機的な状況となっていた。

このため出荷協議会は、地元説明会や意見交換会を開催し 26 年に出荷量安定と販路確保等を目的として湯島農産物部会（13 戸）を設立した。

現在では、物産館の店頭のほかインターネット食料品販売会社と取引を行う等、全国の飲食店にも届けられている。28 年度からは地理的表示（G I）保護制度への登録に向けた研修会、検討を進めており、産地の維持・発展に取り組んでいる。



写真4. 湯島大根と湯島農産物部会

4. むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

(1) 都市農村交流について

平成 13 年から毎年数十名を受け入れ生産者のほ場で、ぶどうやパール柑、タマネギ等の収穫体験を実施し、交流を深めている。湯島では特産の湯島大根の栽培体験のほか、カスミソウを使用したワークショップ、特産品の販売会を計画する等の交流を深めている。

27 年度からは上天草市のふるさと納税の返礼品に上天草産農林水産物が採用され、近年ふるさと納税者の増加とともに全国から高い評価を得ている。



写真5. ぶどうの収穫体験

(2) 学校・地域農業者との連携

平成 17 年度から、温暖な気候を活かして白ニガウリやエンサイ等、亜熱帯地域の野菜栽培を行う「耐暑性健康増進作物導入事業」に取り組んでいる。上天草市内の小学校に苗を配布し、生産者の栽培指導や、収穫時には物産館でレシピ作成のための料理教室イベントを実施している。また、食育の一環として学校給食に食材供給も行っている。



写真6. 耐暑性健康増進作物の料理イベント

上天草地域は花き栽培が盛んで出荷協議会会員の中にも多くの花き生産者がおり、上天草産花きの魅力発信や花に触れる機会創出への機運が高まり、平成 28 年度から花き出荷協議会会員を中心に、花き生産者や地元生花店、上天草市、市場関係者等と協働で「上天草花まつり」を開催している。

30 年 2 月に開催した「第 2 回上天草花まつり」では、物産館近隣の施設を会場に上天草産の切り花展示やそれらを使ったフラワーアレンジメント教室のほか、花き生産者自ら制作した切り花の出荷箱を使った段ボール迷路を設置する等、花でいっぱいのイベント内容とし、1,500 人超の方が来場し、県内外に花き産地「上天草市」を広く P R した。



写真7. 上天草花まつりのミニガーデン

(3) 熊本地震時の連携

平成 28 年 4 月に発生した熊本地震直後、甚大な被害が発生し、主要幹線道路が寸断され、物資不足が顕著であった南阿蘇村に、出荷協議会の有志が集まり支援物資の運搬・配布を行った。通常 1 時間半程度の道のりを 5 時間以上かけて物資の運搬を行い、被災者にたいへん喜ばれ、会員の生産意欲向上にも繋がった。

その後も会員から「継続的な支援活動」が提案され、仮設住宅の高齢者が食料品調達に支障を来している状況を解消するため、南阿蘇村の第 3 セクターと連携して、仮設住宅団地での移動販売を定期的（年 10 回）に行っている。

移動販売活動の継続により、被災者の生活不安を払拭する「痛みの最小化」と南阿蘇村の「創造的復興」支援に取り組んでいる。



写真8. 南阿蘇村の支援活動

九州農政局長賞受賞 農事組合法人^{あしかりのうさん}芦刈農産 (大分県豊後大野市)

～甘藷で躍進する集落営農組織を中心としたむらづくり～

■地域の沿革と概要

農事組合法人芦刈農産のある芦刈地区は、大分県の南部・豊後大野市の東部に位置している。地区の南東部と北西部には2本の谷川が流れており、谷川に沿って細長く水田が分布し、谷川に挟まれた台地上には昭和47年度に基盤整備された畑地が存在している。

地区の畑地は排水が良好で、古くから甘藷、葉たばこ、麦類等の畑作物が作付けされてきたが、水田は極度の排水不良田で、近年まで水稻以外の品目を作付けするのは困難だった。



図1. 位置図

1. むらづくりの動機・背景

(1) 集落営農の取組の始まり

芦刈地区では、昭和50年に有志が「機械利用組合」を設立し、農業機械の共同利用が始まった。これにより、個々で営農を行ってきた農業者に連帯感が生まれ、地区の農業を皆で支えていく意識が醸成された。

平成3年には農業経営の効率化等のため、地区の農家組織として「芦刈農事実行組合」が設立した。



写真1. 大豆の作業風景

(2) コミュニティ機能の低下と「^{あしわか}芦若塾」の設立

集落営農の取組は進んだが、成年層の都市部流出が続き、地区の高齢化とそれによる離農で遊休農地が増加し、地区の活力やコミュニティ機能の低下も懸念された。

このことに危機感を覚え、「地区の農業を活用して地域を盛り上げ、若者が残る地区にしたい。」という思いのもと、青年グループ「芦若塾」が設立された。塾の活動は、地区の祭りへの出店、芋掘り観光農園、合鴨レースといった各種イベントの実施や、遊休農地を利用した野菜生産や合鴨農法の実施と農産物の直売など、「おもしろおかしゅ」をモットーに面白そうなことに何でも取り組んだ。



写真2. 芦若塾の定例会の様子

地区データ

①所在地：大分県豊後大野市
③総人口：240人
⑤農家戸数：37戸

②地区の規模：1集落
④総世帯数：92戸
⑥主要農産物等：甘藷、スイートコーン、大豆

※③④はH30年時、⑤は27年時

（３）将来の地域農業への不安と集落営農組織の法人化

地区の様々な組織の活動により農地やコミュニティの維持が図られたが、芦刈地区で農業が基幹産業となることは難しく、農業の兼業化は進み、若者は地区から離れ、地域農業の存続自体が危ぶまれる状況となった。

このため、「地区の農地を守るとともに、農業でもうけ、将来的には後継者を残したい」という思いのもと、平成 17 年に芦刈農事組合や若芦塾を含めて地区の様々な組織を解散し、出資金 285,000 円、出資者（構成員）57 名で「農事組合法人芦刈農産」（以下、「芦刈農産」という。）を設立した。

2. むらづくりの推進体制

（１）芦刈農産

各部門の役割分担を明確化することで業務に対する責任が生まれ、法人の経営発展によい影響を与えている。

- ア. **理事** 理事は 6 名体制で、代表理事（組合長）、専務理事（副組合長）、常務理事（事務局長）の 3 役が法人運営を実質的に担っており、経営方針の決定、得意先との商談、販路開拓等を行っている。
- イ. **農場担当、調整・出荷担当、大型機械オペレーター** 当部門は、ほ場作業から調整・出荷まで一連の作業を担当しており、農場長が作業計画や人員配置を決定している。男性、女性、若者、高齢者とそれぞれの適正に合わせて役割を分担し、全員が活躍できるように工夫している。
- ウ. **6 次産業部門** 当部門は、法人の生産物を用いた加工品を製造しており、現在は「冷凍焼き芋」と「甘藷のペースト」を製造している。
- エ. **姫の会** 女性のみで組織された部門で、責任者は常務理事が担い、加工品の開発を行っている。女性ならではの視点で商品開発に取り組み、主力商品である「冷凍焼き芋」は姫の会の活動を通じて開発された。

（２）むらづくりを支援する組織

ア. 芦刈地区自治会

自治会は、芦刈農産とは前身の芦若塾の時代から連携して区役の草刈り等の作業を行うほか、イベントの共催も行っている。

イ. 豊後大野市集落営農法人連絡協議会

豊後大野市に存在する集落営農法人で結成された組織で、研修会の開催やイベント参加などを通じて、組織間の連携や情報交換などにより自己研鑽を行っている。畦畔管理部会では、グランドカバープランツのセンチピートグラス吹付機を共同購入し、草刈りの労力削減を図っている。

3. むらづくりの農林漁業面への寄与状況

（１）甘藷の生産・販売による法人経営の確立

平成 23 年、大分県で導入が進んでいた高糖度甘藷「べにはるか」に着目し、栽培に取り組んだ。実需者からの評価も高かったことから、25 年に独自ブランド「はるか姫」として商標登録を行い、需要の増加に伴い作付面積を拡大し、29 年には 7 ha となった。

また、春から夏にかけて甘藷の作業が少ない時期を



写真 3. 直売所「芦刈農産のお店」

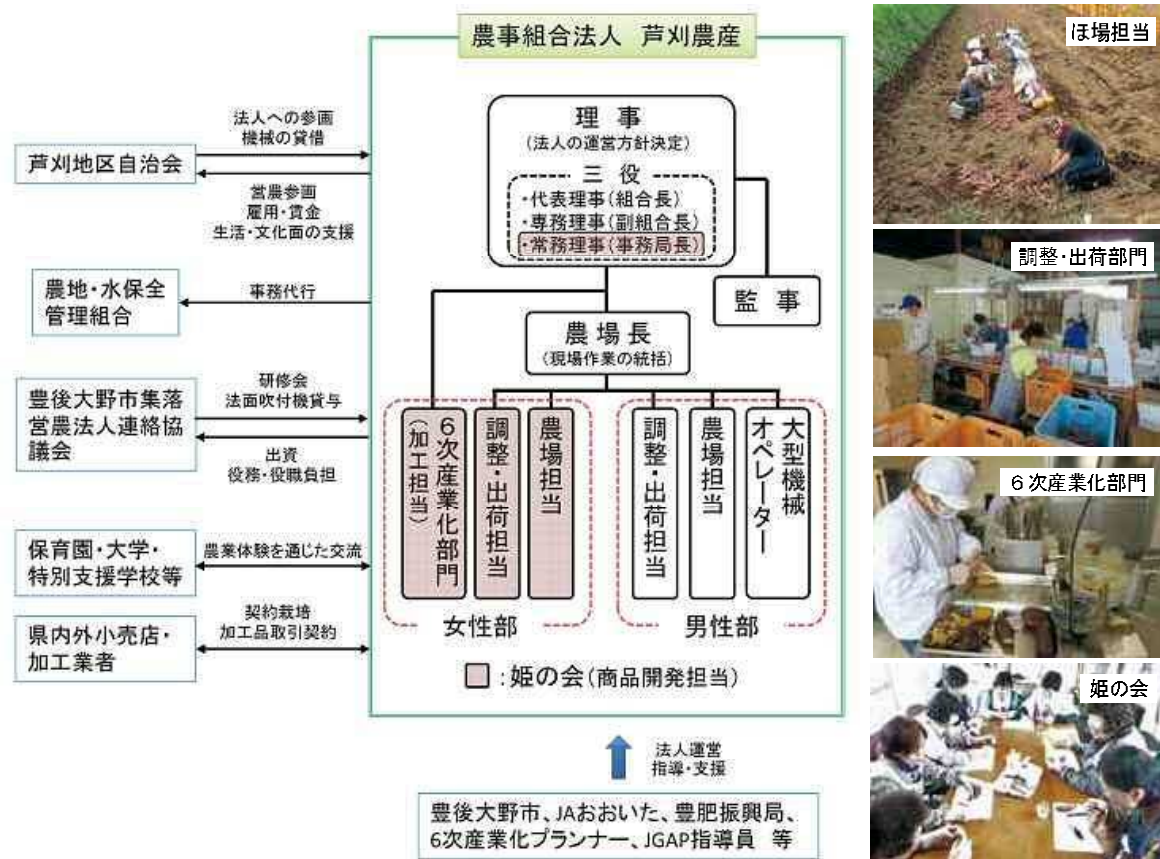


図2. 推進体制図

穴埋めするため、27年からスイートコーン栽培に取り組み、完全周年雇用の体制を整えた。29年の作付面積は7haとなり、甘藷と並び経営の柱の一つになっている。

農産物は28年度に新設した直売所や、法人のホームページ等で販売を行っている。また独自の営業活動によって販路を開拓し、関東地方を中心にスーパーマーケットで販売されている。

(2) 6次産業化の取組

芦若塾時代から、地区で収穫した大豆を地元の豆腐店に加工依頼し、豆腐を販売していたことから、地区には農産物加工の意識は根付いており、平成28年から「べにはるか」の焼き芋の加工と直売を始めた。食味のよさから売上が好調だったため、同年に加工場を新設し、冷凍焼き芋や蒸し芋ペーストといった高糖度甘藷の甘さを活用したユニークな商品を開発・販売することが可能になった。こうしたことから、28年度の加工品の売上は117万円となった。

現在、冷凍焼き芋は新宿高野（東京都）で販売しているほか、甘藷のペーストを利用した製品も開発している。



写真4. 甘藷ペーストを用いた製品

(3) 畑作物の振興

芦刈農産設立以前、地区の農地は耕作放棄地が混在し荒廃していたが、設立後は地区の農地の90%にあたる39haを芦刈農産が集積し、農地を健全に保っている。

また、芦刈農産を含む隣接3法人は、地下水位制御システムの導入等による排水不良

田の排水改良に取り組み、芦刈農産では、大豆、野菜類といった畑作物を積極的に作付けし、農業収入を増や

し、地区の農業を飛躍的に発展させた。これに触発されて他法人も野菜の作付を開始し、市内の他法人の経営改善に寄与している。

表 1. 芦刈地区の麦・大豆・野菜類の作付面積 (ha)

作目	年度	H23	H29	備 考
麦・大豆		14	32	・農地面積 43ha (うち水田 41ha) ・芦刈農産集積面積 39ha ・地下水位制御システム導入面積 17ha
野菜類		2	16	

4. むらづくりの生活・環境整備面への寄与状況

(1) 地区住民の活躍・交流の場の提供、自治会活動への貢献

芦刈農産は、甘藷の導入以降、個人の適性に合わせた作業体系を作っている。例えば、甘藷の収穫時には、女性や高齢者がつる切りや芋の調製を、大型機械オペレーターが芋の掘り起こしを、若手男性職員がコンテナの運搬を担当している。各人に無理のない範囲で作業を割り当てることで、地区住民の出役が安定して確保されるほか、作業を通じて地区住民同士の交流が行われており、コミュニティ機能維持にも貢献している。

また、地区の祭りへの参加、ペタンク大会の景品提供、道路沿いの草刈り、水路維持活動など、自治会の活動に参画している。



写真5. ペタンク大会での餅まき

(2) 地域雇用の創出

芦刈農産では、平成 26 年度以降、地区内外から常時雇用として職員を採用している。現在 (平成 30 年 4 月) は 6 名の職員がおり、20 代の職員 3 名はいずれも市外出身で、後継者を確保するだけでなく集落外から若者を呼び込むことにも成功している。

また、姫の会による冷凍焼き芋の開発は、地区内外から 25 名の女性雇用を生んだ。

地区内で若者・女性が働くことが集落に活力をもたらしている。

なお、28 年度に芦刈農産が、地代、労務費、報酬等として地域に支払った地域還元金は、3,365 万円になった。

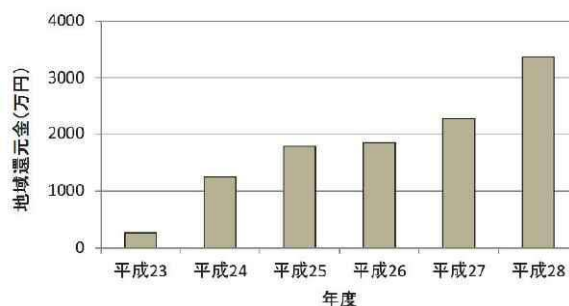


図3. 地元還元金の推移

注) 地元還元金は、支払地代、従事分量配当、雇人費等

(3) 農業を通じた教育・交流の場の提供

近隣の保育園や農業大学校、県内大学等と農業体験を通じた交流活動を行い、農業を知ってもらうための教育の場と子どもや若者と地区住民がふれあう機会を作り出している。平成 29 年度は 8 回で 187 名を受入れた。

また、県内の特別支援学校の生徒の就業体験を受け入れ、障がいを持つ生徒が社会進出するための場も提供している。



写真6. 農業大学校との交流(甘藷収穫)

「豊かなむらづくり全国表彰事業」と「農林水産祭」

■豊かなむらづくり全国表彰事業

本事業は、農山漁村における集落、校区、市町村等を活動範囲とする団体の農林水産業を核とした生活・文化等を含む幅広い地域活動を対象に、農林水産省及び日本農林漁業振興会が昭和54年度から実施しています。

優良事例の表彰を行い、その業績発表等を行うことにより、むらづくりの全国的な展開を助長し、地域ぐるみの連帯感の醸成及びコミュニティ機能の強化を図り、農林漁業及び農山漁村の健全な発展に資することを目的としています。

■農林水産祭

農林水産祭は、農林水産省及び日本農林漁業振興会が、国民の農林水産業と食に対する認識を深めるとともに、農林水産業の技術改善及び経営発展の意欲の高揚を図るため、国民的な祭典として昭和37年から毎年11月23日の勤労感謝の日を中心に開催しています。

毎年、全国各地の農林水産関係団体が農林水産祭参加行事として開催する約310に及ぶ農林水産物の品評会・コンクール等において農林水産大臣賞を受賞した者の中から、農林水産祭中央審査委員会が7部門（農産・蚕糸、園芸、畜産、林産、水産、多角化経営、むらづくり）の天皇杯、内閣総理大臣賞、日本農林漁業振興会会長賞を選定しています。

むらづくり部門は、「豊かなむらづくり全国表彰事業」において選定された農林水産大臣賞受賞団体のなかから天皇杯等が選定されます。

■審査・表彰の流れ

都道府県知事からの推薦を受けた団体について、地方農政局に設けた「むらづくり審査会」において、農林水産大臣賞及び地方農政局長賞を選定します。

さらに、農林水産大臣賞のうち優良な団体について、農林水産祭中央審査委員会で天皇杯等3賞の選定を行います。



むらづくり部門天皇杯等受賞団体一覧表

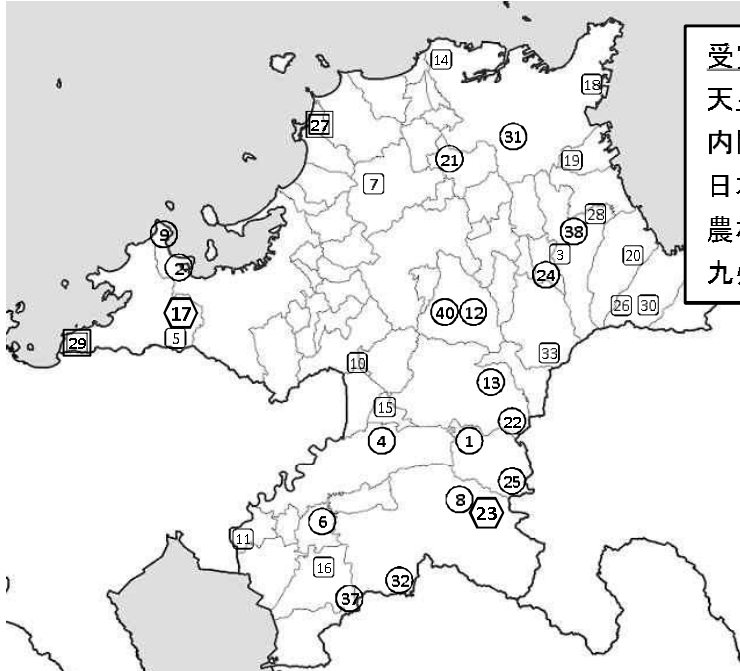
年度	天皇杯	内閣総理大臣賞	日本農林漁業振興会会長賞
昭和54年度	新しいむらづくり推進委員会 (愛媛県伊方町)	根小屋集落連合会 (秋田県北秋田市)	—
55年度	養生集落 (鹿児島県屋久島町)	古見をよくする会 (岡山県真庭市)	—
56年度	梓山集落 (長野県川上村)	松神集落 (鳥取県北栄町)	—
57年度	姥屋敷集落 (岩手県滝沢村)	野田区 (愛知県田原市)	—
58年度	東部地区振興協議会 (山形県小国町)	新しいむらづくり推進会議 (栃木県那須塩原市)	—
59年度	玖珠町山田地区 (大分県玖珠町)	広船部落会 (青森県平川市)	—
60年度	飯田集落 (鳥根県益田市)	荷経部落会 (岩手県久慈市)	—
61年度	大木区 (愛知県豊川市)	小串自治会 (長崎県新上五島町)	—
62年度	清助新田むらづくり委員会 (山形県寒河江市)	八千代町コミュニティ推進委員会 (茨城県八千代町)	—
63年度	諸塚村自治公民館連絡協議会 (宮崎県諸塚村)	円城寺地区 (滋賀県愛荘町)	両向自治会 (岩手県住田町)
平成元年度	熊地区活性化推進協議会 (静岡県浜松市)	七軒地域づくり推進協議会 (山形県大江町)	浅川生活環境改善実行委員会 (徳島県海陽町)
2年度	上別府東部地区むらづくり振興会 (鹿児島県南九州市)	大原地区 (鳥取県倉吉市)	水と緑の村づくり推進会議 (福井県大野市)
3年度	若戸村づくり実行委員会 (長崎県雲仙市)	福釜町内会 (愛知県安城市)	下帯島部落会 (岩手県洋野町)
4年度	国頭むらづくり委員会 (鹿児島県和泊町)	小郷区 (岐阜県中津川市)	琴浦集落 (新潟県佐渡市)
5年度	和光地区自治会 (岩手県金ヶ崎町)	琵琶池村づくり推進協議会 (栃木県大田原市)	大見集落 (熊本県宇城市)
6年度	大塚むらづくり委員会 (鹿児島県枕崎市)	西塩沢農村整備促進委員会 (長野県立科町)	森藤むらづくり推進協議会 (徳島県吉野川市)
7年度	三隅町上地区発展対策協議会 (山口県長門市)	新怡土むらづくり推進協議会 (福岡県糸島市)	四郷自治振興協議会 (和歌山県かつらぎ町)
8年度	秋津野塾 (和歌山県田辺市)	土呂部地区水芭蕉の郷づくり推進委員会 (栃木県日光市)	菊永むらづくり推進委員会 (鹿児島県南九州市)
9年度	南波多町農業振興協議会 (佐賀県伊万里市)	大井平集落 (新潟県津南町)	大和むらづくり会議 (鳥取県鳥取市)
10年度	上堀自治公民館 (鹿児島県出水市)	(農事組合法人) 大甘野宮農組合 (京都府亀岡市)	藤田むらづくり推進協議会 (青森県五所川原市)
11年度	石川郷中 (秋田県八峰町)	(農業生産法人、有限会社) 農業公園信貴山のど か村(奈良県三郷町)	西与賀地域実践協議会 (佐賀県佐賀市)
12年度	正名字 (鹿児島県知名町)	中石自治会 (秋田県男鹿市)	常吉村づくり委員会 (京都府京丹後市)
13年度	仁保地域開発協議会 (山口県山口市)	星野村農業・農村を考える会 (福岡県八女市)	舞岡ふるさと村推進協議会 (神奈川県横浜府)
14年度	大井沢区 (山形県西川町)	夢ランド十町 (熊本県和水町)	一本自治振興区 (広島県庄原市)
15年度	綾織町地域づくり連絡協議会 (岩手県遠野市)	小川区 (岐阜県郡上市)	豊永開発振興会 (岡山県新見市)
16年度	松本集落 (大分県宇佐市)	農事組合法人いぐみ (静岡県島田市)	上鹿妻第一地区協同組合 (岩手県盛岡市)
17年度	渡慶次集落 (沖縄県読谷村)	十和村おかみさん市 (高知県四万十町)	あんずの里市利用組合 (福岡県福津市)
18年度	ふき活性化協議会 (大分県豊後高田市)	共栄地区を良くする会 (和歌山県印南町)	中村集落 (秋田県横手市)
19年度	伊座利の未来を考える推進協議会 (徳島県美波町)	古座川ゆず平井の里 (和歌山県古座川町)	福吉地域づくり推進協議会 (福岡県糸島市)
20年度	櫛池地区農業振興会 (新潟県上越市)	田沢湖牛銘柄確立推進組合 (秋田県仙北市)	川内野集落 (佐賀県伊万里市)
21年度	小城町農産物直売所「ほたるの郷」 (佐賀県小城市)	善屋武集落 (沖縄県糸満市)	槻之屋振興会 (鳥根県雲南市)
22年度	下里農地・水・環境向上対策委員会 (埼玉県小川町)	大野ヶ原開拓組合 (愛媛県西予市)	特定非営利活動法人かまエブルーツーリズム研究 会(大分県佐伯市)
23年度	農事組合法人宮守川上流生産組合 (岩手県遠野市)	奥能登春蘭の里実行委員会 (石川県能登町)	久富木区公民館 (鹿児島県さつま町)
24年度	浄門の里づくり協議会 (岩手県二戸市)	NPO法人 とうもろの会 (静岡県掛川市)	親和校区 (鹿児島県西之表市)
25年度	田代自治会 (宮崎県えびの市)	農事組合法人ファーム大島 (富山県射水市)	波瀬むらづくり協議会 (三重県松阪市)
26年度	自得地区環境保全会 (青森県弘前市)	染ヶ岡地区環境保全協議会 (宮崎県高鍋町)	宮地集落 (岐阜県郡上市)
27年度	三芳町川越いも振興会 (埼玉県三芳町)	須佐地区一本釣船団 (山口県萩市)	農事組合法人南檜垣宮農組合 (奈良県天理市)
28年度	地域共同組合無茶々園 (愛媛県西予市)	大野地区公民館 (鹿児島県垂水市)	ゆかい村風間浦鯨鯨ブランド戦略会議 (青森県風間浦村)
29年度	阿室校区活性化対策委員会 (鹿児島県宇検村)	からり直売所出荷者運営協議会 (愛媛県内子町)	特定非営利活動法人ゆうぎの里東とふるさとづくり 協議会(福島県二本松市)
30年度	本寺地区地域づくり推進協議会 (岩手県一関市)	特定非営利活動法人ゆうきハートネット (岐阜県白川町)	中津川区公民館 (鹿児島県さつま町)

注1:むらづくり部門の日本農林漁業振興会会長賞は昭和63年度に新設

注2:太字・着色は九州の受賞団体

受賞団体一覧表（福岡県）

年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号	年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号
昭和54年度	末石集落	うきは市（吉井町）	農	①	11年度	新入農業農村活性化実行委員会	直方市	農	②①
55年度	元岡地区	福岡市	農	②	12年度	杷木町農林業等総合振興対策協議会	朝倉市（杷木町）	農	②②
56年度	犀川町崎山区	みやこ町（犀川町）		3	13年度	星野村農業・農村を考える会	八女市（星野村）	内・農	②③
57年度	住みよい弓削をつくる会	久留米市（北野町）	農	④	14年度	赤村特産物センター運営協議会	赤村	農	②④
58年度	雷山地区	糸島市（前原市）		5	15年度	小塩んホテルの里づくり協議会	うきは市（浮羽町）	農	②⑤
59年度	前津地区	筑後市	農	⑥	16年度	岩屋地区活性化協議会	豊前市		26
60年度	日吉地区	宮若市（若宮町）		7	17年度	あんずの里市利用組合	福津市（津屋崎町）	振・農	②⑦
61年度	棕谷地区	八女市（星野村）	農	⑧	18年度	豊津町営農生産組合	みやこ町（豊津町）		28
62年度	西浦地区	福岡市	農	⑨	19年度	福吉地域づくり推進協議会	糸島市（二丈町）	振・農	②⑨
63年度	西小田営農組合	筑紫野市		10	20年度	合河ゆず祭り実行委員会	豊前市		30
平成元年度	紅粉屋地区村づくり推進協議会	大川市		11	21年度	合馬校区まちづくり協議会地域振興部会	北九州市	農	③①
2年度	宮小路果樹組合	嘉麻市（嘉穂町）	農	⑫	22年度	松尾百笑村	八女市（立花町）	農	③②
3年度	高木むらおこし対策協議会	朝倉市（甘木市）	農	⑬	23年度	上津野村づくり推進協議会	添田町		33
4年度	有毛地区	北九州市		14	24年度	—	—	—	—
5年度	富田区	大刀洗町		15	25年度	—	—	—	—
6年度	瀬高町地域農業振興協議会	みやま市（瀬高町）		16	26年度	—	—	—	—
7年度	新怡土むらづくり推進協議会	糸島市（前原市）	内・農	⑮	27年度	伍位野集落	みやま市（山川町）	農	③⑦
8年度	猿喰地区	北九州市		18	28年度	くまわり会	みやこ町（犀川町）	農	③⑧
9年度	等覚寺地区	苅田町		19	29年度	—	—	—	—
10年度	いわまる共和国	築上町（椎田町）		20	30年度	小野谷行政区	嘉麻市（嘉穂町）	農	④⑩

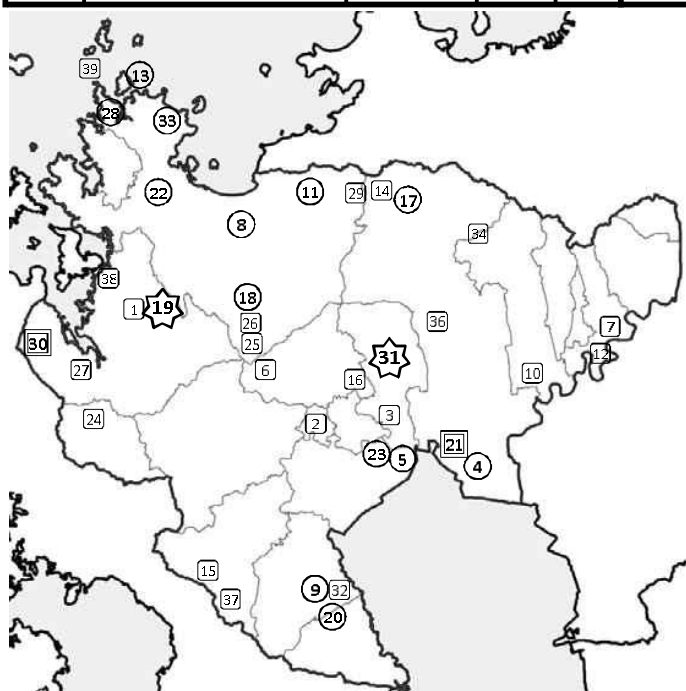


受賞団体数	36
天皇杯受賞	0
内閣総理大臣賞受賞	2
日本農林漁業振興会長賞受賞	2
農林水産大臣賞受賞	21
九州農政局長賞受賞	15

注1: 所在市町村は現在の市町村名。
 ()は、平成11年以降に市町村合併があった場合の団体の所在地の旧市町村名。
 注2: 受賞区分の表記区分
 天＝天皇杯 内＝内閣総理大臣賞
 農＝農林水産大臣賞 無印＝九州農政局長賞
 注3: 図面番号表記の表記区分
 ☆＝天皇杯
 ①＝内閣総理大臣賞
 ②＝日本農林漁業振興会長賞
 ③＝農林水産大臣賞
 ④＝九州農政局長賞
 注4: 佐賀県～鹿児島県も同じ。

受賞団体一覧表（佐賀県）

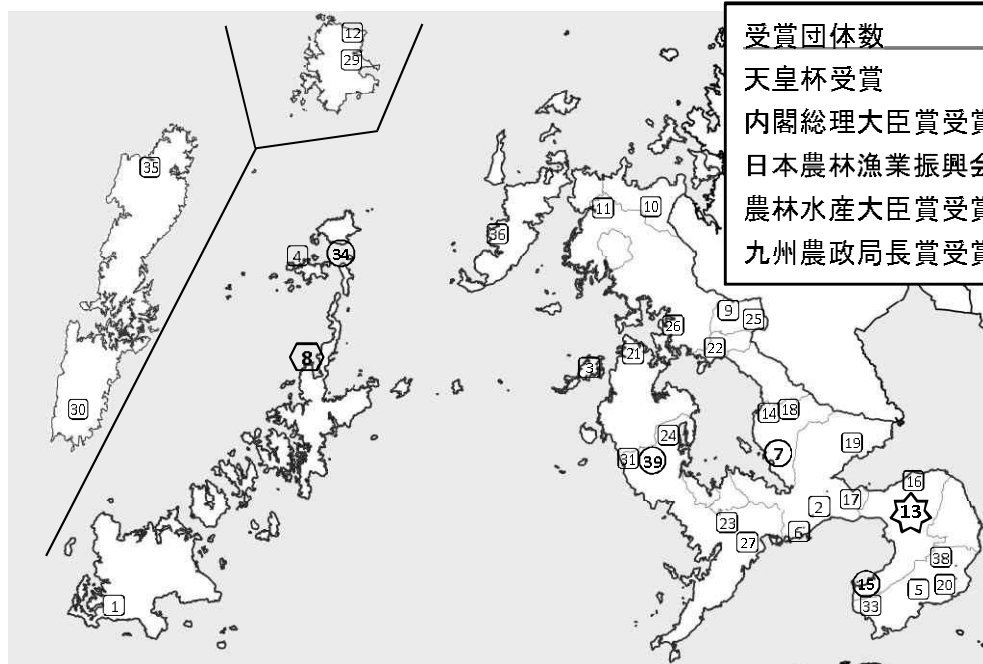
年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号	年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号
昭和54年度	南波多町農業振興協議会	伊万里市		1	11年度	西与賀地域実践協議会	佐賀市	振・農	21
55年度	畑ヶ田集落	大町町		2	12年度	大良むらぐるみ運動実践協議会	唐津市	農	22
56年度	練ヶ里集落	小城市 (牛津町)		3	13年度	福富地域むらぐるみ運動実践協議会	白石町 (福富町)	農	23
57年度	大野集落	佐賀市 (東与賀町)	農	4	14年度	岳集落	有田町 (西有田町)		24
58年度	福富町北区	白石町 (福富町)	農	5	15年度	藤野地区	唐津市 (相知町)		25
59年度	西多久地区拠点地域実践協議会	多久市		6	16年度	JA佐賀松浦蓬地の里直販所利用運営協議会	唐津市 (相知町)		26
60年度	市原地区	みやき町 (北茂安町)		7	17年度	脇野集落	伊万里市		27
61年度	半田地区	唐津市	農	8	18年度	桃山天下市会	唐津市 (鎮西町)	農	28
62年度	七浦地区	鹿島市	農	9	19年度	大臼木活力あるむらづくり推進委員会	唐津市 (七山村)		29
63年度	千代田町小森田地区	神埼市 (千代田町)		10	20年度	川内野集落	伊万里市	振・農	30
平成元年度	七山村振興協議会	唐津市 (七山村)	農	11	21年度	小城市農産物直売所「ほたるの郷」	小城市 (小城市)	天・農	31
2年度	ここほれジュッタンボ会	みやき町 (三根町)		12	22年度	嘉瀬の浦区	鹿島市		32
3年度	加部島地区	唐津市 (呼子町)	農	13	23年度	玄海みなとん里株式会社	唐津市	農	33
4年度	羽金山振興会	佐賀市 (富士町)		14	24年度	佐賀北部地域おこしフェスティバル実行委員会	佐賀市・神埼市 (富士町・三瀬村・青瀬村)		34
5年度	清水集落	嬉野市 (嬉野町)		15	25年度	橘町まちづくり推進協議会	武雄市		35
6年度	北坊集落	多久市		16	26年度	株式会社そよかぜ館	佐賀市 (大和町)		36
7年度	杉山集落	佐賀市 (富士町)	農	17	27年度	吉田地区	嬉野市 (嬉野町)		37
8年度	伊岐佐上集落	唐津市 (相知町)	農	18	28年度	波多津町まちづくり運営協議会	伊万里市		38
9年度	南波多町農業振興協議会	伊万里市	天・農	19	29年度	松島集落	唐津市 (鎮西町)		39
10年度	伊福集落	太良町	農	20	30年度	—	—	—	—



受賞団体数	39
天皇杯受賞	2
内閣総理大臣賞受賞	0
日本農林漁業振興会長賞受賞	2
農林水産大臣賞受賞	17
九州農政局長賞受賞	22

受賞団体一覧表（長崎県）

年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号	年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号
昭和54年度	大宝肉用牛生産組合	五島市（玉之浦町）		1	11年度	よかところ実行委員会	西海市（西海町）		21
55年度	有喜地区むらづくり推進委員会	諫早市		2	12年度	中山・五反田里づくりの会	川棚町		22
56年度	大島町むらづくり運営委員会	西海市（大島町）		3	13年度	現川物産館じげもん市	長崎市		23
57年度	緑を守る小値賀町青年連合会	小値賀町		4	14年度	「きんかい味彩市」生産者の会	長崎市（琴海町）		24
58年度	北有馬町むらづくり推進委員会	南島原市（北有馬町）		5	15年度	鬼木郷地区	波佐見町		25
59年度	開名団組	諫早市（飯盛町）		6	16年度	わくわくふれあい市利用組合	佐世保市		26
60年度	鈴田地区開発振興会	大村市	農	⑦	17年度	中尾地区農業振興協議会	長崎市		27
61年度	小串郷自治会	新上五島町（新魚目町）	内・農	⑧	18年度	—	—	—	—
62年度	川内郷振興会	波佐見町		9	19年度	芦辺湯岳生産組合	壱岐市（芦辺町）		29
63年度	田ノ平免	松浦市		10	20年度	内山地区むらづくり代表者会	対馬市（厳原町）		30
平成元年度	根引農事研究会	佐世保市（江迎町）		11	21年度	大中尾棚田保全組合	長崎市（外海町）		31
2年度	惣清地区生活改善グループ	壱岐市（芦辺町）		12	22年度	—	—	—	—
3年度	岩戸村づくり実行委員会	雲仙市（瑞穂町）	天・農	⑬	23年度	後登龍活性化委員会	南島原市（加津佐町）		33
4年度	松原地域掘り起こし実行委員会	大村市		14	24年度	特定非営利活動法人おちかアイランドツーリズム協会	小値賀町	農	⑭
5年度	南串山町新農業研究会	雲仙市（南串山町）	農	⑮	25年度	佐護ヤマネコ稲作研究会	対馬市（上県町）		35
6年度	高田むらづくり実行委員会	雲仙市（瑞穂町）		16	26年度	根獅子集落機能再編協議会	平戸市		36
7年度	田尻名干拓部落	諫早市（森山町）		17	27年度	—	—	—	—
8年度	野岳山麓農村活性化協議会	大村市		18	28年度	一般社団法人南島原ひまわり観光協会	南島原市		38
9年度	折山集落	諫早市（高来町）		19	29年度	大中尾棚田保全組合	長崎市（外海町）	農	⑲
10年度	赤仁田営農組合	南島原市（西有家町）		20	30年度	—	—	—	—

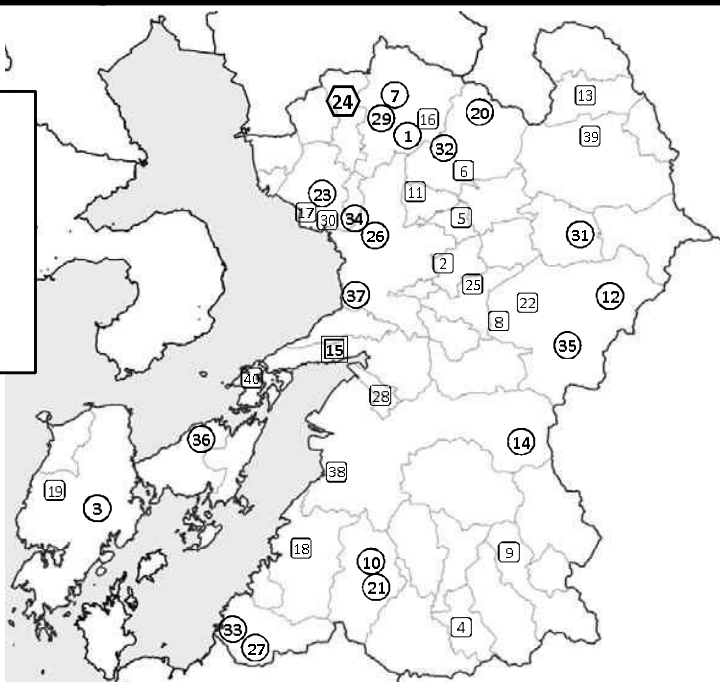


受賞団体数	36
天皇杯受賞	1
内閣総理大臣賞受賞	1
日本農林漁業振興会長賞受賞	0
農林水産大臣賞受賞	6
九州農政局長賞受賞	30

受賞団体一覧表（熊本県）

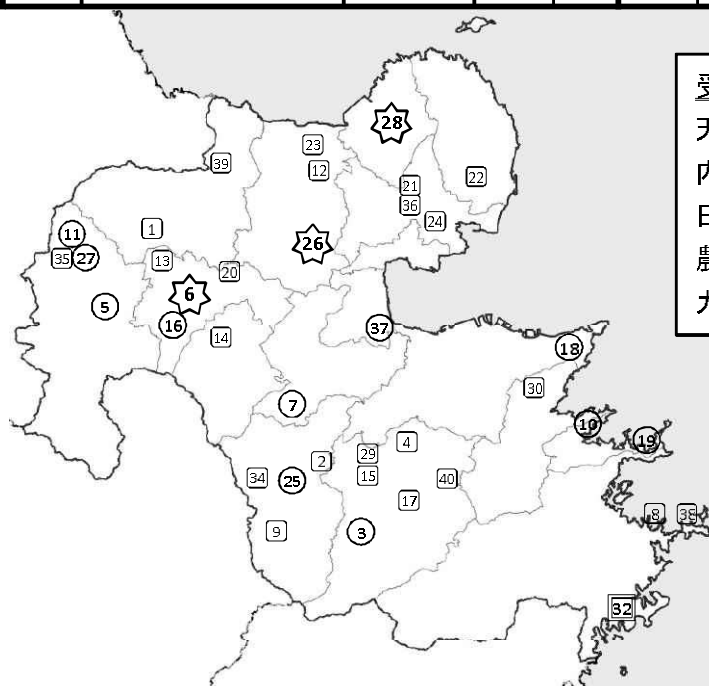
年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号	年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号
昭和54年度	馬見塚振興会	山鹿市	農	①	11年度	毎床地区	球磨村	農	⑲
55年度	小池・秋永地区	益城町		2	12年度	入佐地区	山都町(矢部町)		22
56年度	碓石地区	天草市(新和町)	農	③	13年度	尾田地区	玉名市(天水町)	農	⑲
57年度	清水地区	あさぎり町(上村)		4	14年度	夢ランド十町	和水町(三加和町)	内・農	⑳
58年度	堀川地区	菊陽町		5	15年度	八勢地区	御船町		25
59年度	福本地区	菊池市		6	16年度	西里とれたて市会	熊本市	農	㉑
60年度	小坂地区	山鹿市	農	⑦	17年度	村丸ごと生活博物館頭石	水俣市	農	㉒
61年度	島木地区	山都町(矢部町)		8	18年度	吉野梨研究同志会	氷川町(竜北町)		28
62年度	柳野集落	多良木町		9	19年度	平小城活性化協議会	山鹿市	農	㉓
63年度	球磨村森林組合	球磨村	農	⑩	20年度	天水農産物直売所協議会「てんすい郷〇市」	玉名市(天水町)		30
平成元年度	江良区	合志市(西合志町)		11	21年度	両併地区	南阿蘇村(白水村)	農	㉔
2年度	熊本清和農業協同組合	山都町(清和村)	農	⑫	22年度	七城ホテルを育てる会	菊池市(七城町)	農	㉕
3年度	中湯田集落	南小国町		13	23年度	村丸ごと生活博物館越小場地区	水俣市	農	㉖
4年度	五家荘平家の里管理組合	八代市(泉村)	農	⑭	24年度	東門寺集落	熊本市	農	㉗
5年度	大見集落	宇城市(不知火町)	振・農	⑮	25年度	菅地域振興会	山都町(矢部町)	農	㉘
6年度	阿佐古集落	山鹿市(菊鹿町)		16	26年度	大浦地区振興会	天草市(有明町)	農	㉙
7年度	横島町特産物振興協会	玉名市(横島町)		17	27年度	天明環境保全隊	熊本市	農	㉚
8年度	横居木集落	芦北町(田浦町)		18	28年度	NPO法人二見わっしょいファーム	八代市		38
9年度	福連木地区	天草市(天草町)		19	29年度	手野名水会	阿蘇市(一の宮町)		39
10年度	鳳来地区	菊池市	農	⑯	30年度	上天草物産館さんばーる出荷協議会	上天草市		40

受賞団体数	40
天皇杯受賞	0
内閣総理大臣賞受賞	1
日本農林漁業振興会長賞受賞	1
農林水産大臣賞受賞	21
九州農政局長賞受賞	19



受賞団体一覧表（大分県）

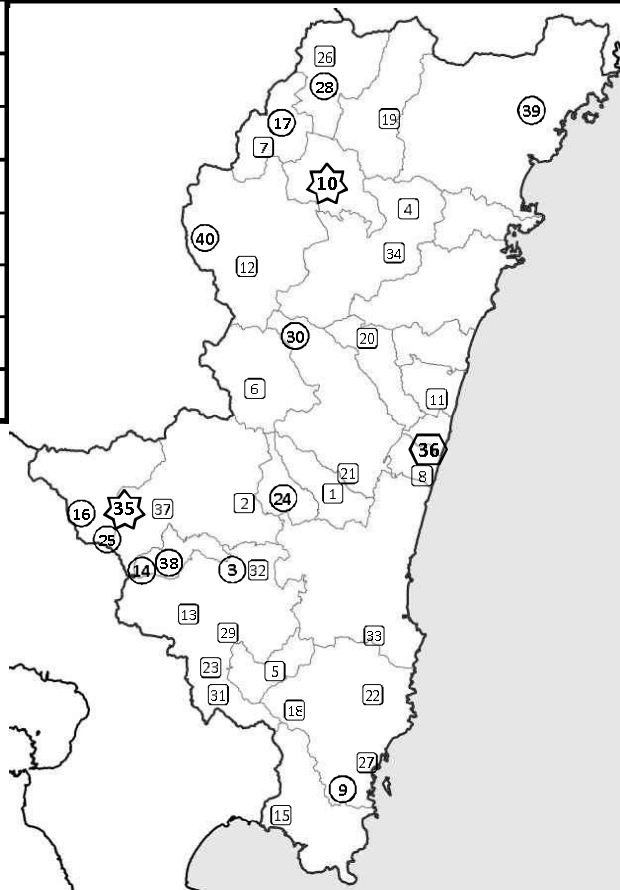
年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号	年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号
昭和54年度	鎌城酪農部	中津市（耶馬溪町）		1	11年度	竜船蛟の里づくりの会	杵築市（山香町）		21
55年度	温見地区	豊後大野市（朝地町）		2	12年度	山口陽農会	国東市（安岐町）		22
56年度	草深野集落	豊後大野市（緒方町）	農	③	13年度	下城井農用地改善組合	宇佐市		23
57年度	津留農地利用組合	豊後大野市（大野町）		4	14年度	新庄むらづくり協議会	杵築市		24
58年度	大山町農業協同組合	日田市（大山町）	農	⑤	15年度	九重野地区担い手育成推進協議会	竹田市	農	②⑤
59年度	山田西区	玖珠町	天・農	⑥	16年度	松本集落	宇佐市（安心院町）	天・農	②⑥
60年度	住みよい豊かなむらにする会	由布市（庄内町）	農	⑦	17年度	大肥郷ふるさと農業振興会	日田市	農	②⑦
61年度	大分県漁業協同組合米水津支店	佐伯市（米水津村）		8	18年度	ふき活性化協議会	豊後高田市	天・農	②⑧
62年度	荻町恵良原地区	竹田市（荻町）		9	19年度	温見地区	豊後大野市（朝地町）		29
63年度	長目地区むらづくり推進協議会	津久見市	農	⑩	20年度	藤河内・元気なむらづくりの会	臼杵市		30
平成元年度	大鶴地区	日田市	農	⑪	21年度	—	—	—	—
2年度	下矢部地区	宇佐市		12	22年度	NPO法人かまえブルーーツーリズム研究会	佐伯市（蒲江町）	振・農	③②
3年度	古後地区活性化委員会	玖珠町		13	23年度	—	—	—	—
4年度	菅原自治会	九重町		14	24年度	農事組合法人紫草の里営農組合	竹田市		34
5年度	綿田地区自治会	豊後大野市（朝地町）		15	25年度	農事組合法人小野谷	日田市		35
6年度	小田生き生き健康村実行委員会	玖珠町	農	⑬	26年度	農事組合法人こめ・こめ・くらぶ	杵築市（山香町）		36
7年度	清川町林業研究グループ	豊後大野市（清川町）		17	27年度	内成の棚田とむらづくりを考える会	別府市	農	③⑦
8年度	木佐上コミュニティ	大分市（佐賀関町）	農	⑬	28年度	間越地区活性化推進協議会	佐伯市（米水津村）		38
9年度	深良津二世会	津久見市	農	⑬	29年度	三光コスモス祭り実行委員会	中津市（三光村）		39
10年度	山下を良くする会	玖珠町		20	30年度	農事組合法人芦刈農産	豊後大野市（三重町）		40



受賞団体数	38
天皇杯受賞	3
内閣総理大臣賞受賞	0
日本農林漁業振興会長賞受賞	1
農林水産大臣賞受賞	15
九州農政局長賞受賞	23

受賞団体一覧表（宮崎県）

年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号	年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号
昭和54年度	国富町新農業振興対策協議会	国富町		1	15年度	西長江浦むらづくり協議会	えびの市	農	(25)
55年度	内山集落	小林市(須木村)		2	16年度	高千穂町下野西集落	高千穂町		26
56年度	笛水集落	都城市(高崎町)	農	(3)	17年度	南平営農組合	日南市		27
57年度	細宇納間公民館	美郷町(北郷村)		4	18年度	五ヶ村地区むらづくり協議会	高千穂町	農	(28)
58年度	長田地区公民館	三股町		5	19年度	薄谷むらづくり推進協議会	都城市		29
59年度	西米良果樹振興協議会	西米良村		6	20年度	銀鏡むらづくり推進会	西都市	農	(30)
60年度	宮の原地区	五ヶ瀬町		7	21年度	NPO法人正応寺ごんだの会	都城市		31
61年度	日置地区	新富町		8	22年度	高崎町笛水地区活性化委員会	都城市(高崎町)		32
62年度	新しい村づくり推進委員会	日南市(南郷町)	農	(9)	23年度	下小松集落営農組合	宮崎市		33
63年度	諸塚村自治公民館連絡協議会	諸塚村	天・農	(10)	24年度	上野原地区集落営農組合	美郷町(西郷村)		34
平成元年度	清水・孫谷農事振興組合	川南町		11	25年度	田代自治会	えびの市	天・農	(35)
2年度	桑の実生活改善グループ	椎葉村		12	26年度	染ヶ岡地区環境保全協議会	高鍋町	内・農	(36)
3年度	上南山田地区営農振興組合	都城市(山田町)		13	27年度	北きりしま田舎物語推進協議会	小林市・えびの市・高原町		37
4年度	花堂むらおこしグループ	高原町	農	(14)	28年度	農事組合法人はなどう	高原町	農	(38)
5年度	笠祇地区村づくり推進協議会	串間市		15	29年度	川坂川を守る会	延岡市(北川町)	農	(39)
6年度	池島区	えびの市	農	(16)	30年度	焼畑蕎麦苦楽部	椎葉村	農	(40)
7年度	宮の原むらづくり推進協議会	五ヶ瀬町	農	(17)					
8年度	酒谷地区むらおこし推進協議会	日南市		18					
9年度	鹿川集落	日之影町		19					
10年度	中之又ふれあい里づくり協議会	木城町		20					
11年度	石野田集落	西都市		21					
12年度	大藤地区推進委員会	日南市(北郷町)		22					
13年度	横市農用地利用改善組合	都城市		23					
14年度	綾町有機農業実践振興会	綾町	農	(24)					

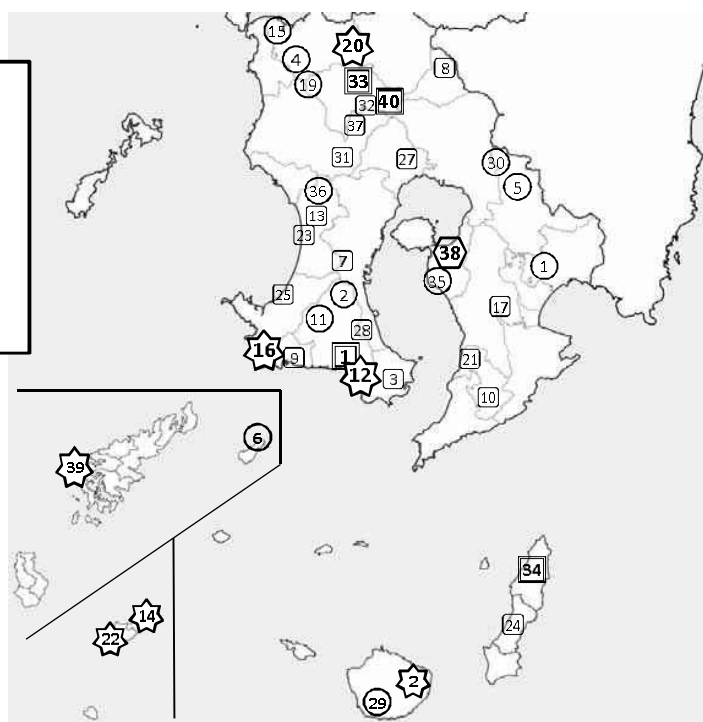


受賞団体数	40
天皇杯受賞	2
内閣総理大臣賞受賞	1
日本農林漁業振興会長賞受賞	0
農林水産大臣賞受賞	15
九州農政局長賞受賞	25

受賞団体一覧表(鹿児島県)

年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号	年度	団体名	所在市町村	受賞区分	図面番号
昭和54年度	蓬原中野小組合	志布志市(有明町)	農	①	11年度	池田校区振興会	錦江町(大根占町)		21
55年度	麦生集落	屋久島町(屋久町)	天・農	②	12年度	正名字	知名町	天・農	②②
56年度	浜児ヶ水区	指宿市(山川町)		3	13年度	扇尾公民館	日置市(日吉町)		23
57年度	高尾野千間山集落	出水市(高尾野町)	農	④	14年度	野間下地区むらづくり委員会	中種子町		24
58年度	帯野地区	曾於市(財部町)	農	⑤	15年度	舞敷野公民館	南さつま市(加世田市)		25
59年度	小野津地区	喜界町	農	⑥	16年度	高田むらづくり委員会	南九州市(川辺町)	農	②⑥
60年度	永野地区	日置市(吹上町)		7	17年度	小山田地区むらづくり委員会	姶良市(加治木町)		27
61年度	川添地区	湧水町(吉松町)		8	18年度	塗木むらづくり推進委員会	南九州市(知覧町)		28
62年度	桜馬場地区	枕崎市		9	19年度	原区むらづくり委員会	屋久島町(屋久町)	農	②⑨
63年度	花瀬地区むらづくり推進協議会	錦江町(田代町)		10	20年度	中谷地区むらづくり委員会	曾於市(財部町)	農	③⑩
平成元年度	永田地区営農振興会	南九州市(川辺町)	農	⑪	21年度	大馬越地区コミュニティ協議会	薩摩川内市(入来町)		31
2年度	上別府東部地区むらづくり振興会	南九州市(額娃町)	天・農	⑫	22年度	永野区むらづくり委員会	さつま町(薩摩町)		32
3年度	田代地区むらづくり振興会	日置市(東市来町)		13	23年度	久富木区公民館	さつま町(宮之城町)	振・農	③③
4年度	国頭むらづくり委員会	和泊町	天・農	⑭	24年度	現和校区	西之表市	振・農	③④
5年度	青木地区	出水市(野田町)	農	⑮	25年度	新城地区公民館	垂水市	農	③⑤
6年度	大塚村づくり委員会	枕崎市	天・農	⑯	26年度	高山地区公民館	日置市(東市来町)	農	③⑥
7年度	大迫むらづくり推進委員会	鹿屋市(串良町)		17	27年度	黒木地区コミュニティ協議会	薩摩川内市(祁答院町)		37
8年度	菊永むらづくり推進委員会	南九州市(知覧町)	振・農	⑰	28年度	大野地区公民館	垂水市	内・農	③⑧
9年度	時吉区公民館	さつま町(宮之城町)	農	⑱	29年度	阿室校区活性化対策委員会	宇検村	天・農	③⑨
10年度	上場自治公民館	出水市	天・農	⑳	30年度	中津川区公民館	さつま町(薩摩町)	振・農	④⑩

受賞団体数	40
天皇杯受賞	7
内閣総理大臣賞受賞	1
日本農林漁業振興会長賞受賞	4
農林水産大臣賞受賞	24
九州農政局長賞受賞	16



福祉と農業が連携する「農福連携」

農業と福祉が連携する「農福連携」

近年、福祉分野と農業分野が連携した「農福連携」の取組が各地で盛んになっており、政府が定めた「ニッポン一億総活躍プラン」(平成28年6月閣議決定)では、障害者等が、希望や能力、障害の特性等に応じて最大限活躍できる環境を整備するため、農福連携の推進が盛り込まれています。

農福連携の取組は、地域における障害者の就労訓練や雇用、高齢者の生きがい等の場となるだけでなく、労働力不足や過疎化といった問題を抱える農業・農村にとっても、働き手の確保や地域農業の維持、更には地域活性化にもつながることから、より一層の推進が求められています。

障害特性を活かした農作業の実施

- ◆ 農業は作業の種類が多く、作業の内容も異なることから、障害者一人ですべての農作業をするのは困難です。
- ◆ しかし、農作業を切り分け、複数の障害者が一つのチームとなって、能力に応じてそれぞれが得意な作業を行うことで農作業も可能となります。
- ◆ 更に、農作業をマニュアル化したり、農作業・農器具を工夫することで、障害者ができる農作業の範囲は拡大します。

Q 地域で障害者に農作業などを請け負っていただく場合の支援策はありますか。

A 障害者が農業経営体で農作業等を行うための環境整備などに要する経費を支援できます。

対策名	内容	補助率	実施主体
農山漁村振興交付金 農福連携対策 (ハード) ○農福連携整備事業 ・受入環境整備事業	(ハード) ・農業経営体が労働力として障害者を受け入れるための施設(休憩所、作業場、更衣室、衛生設備、安全設備等)の整備	1/2等	市町村を含む 地域協議会
(ソフト) ○農福連携支援事業 ・農作業等支援サポーター育成・派遣事業 ・就農等支援研修事業	(ソフト) ・障害者の受け入れに当たっての農作業等の支援サポーター育成・派遣 ・就農等を希望する障害者に対する農業経営体における研修並びに分業体制の構築、作業手順の図化及びマニュアル作成	定額	

問い合わせ先

農業分野における障害者就労の促進ネットワーク

農業分野における障害者就労を促進するため、行政、福祉、農業等の関係者で構成するネットワークを、地方農政局等の単位で設立しています。全国で展開する優良事例の紹介や、関係者が集うセミナーの開催等を行っていますので、気軽にお問い合わせください。

九州地域農福連携促進ネットワーク

http://www.maff.go.jp/kyusyu/keikaku/noufuku/noufuku_top.html

事務局：九州農政局農村振興部農村計画課 TEL:096-211-9111 (内線4616,4611)

平成 30 年度 むらネット九州（豊かなむらづくりをめざして）

発行：九州農政局

編集：農村振興部農村計画課

〒860-8527

熊本市西区春日 2 丁目 10 番 1 号 熊本地方合同庁舎

TEL：096-211-9111（内線 4611）

FAX：096-211-9812（農村振興部）

九州農政局ホームページ：<http://www.maff.go.jp/kyusyu/>

リサイクル適性 

この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。